
東方禿狗祿

蠱毒成長中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方禿狗禄

【Nコード】

N7503G

【作者名】

蠱毒成長中

【あらすじ】

森近霖之助、暴走。突如力を得て人格が豹変した半妖に敗北、拘束された八雲紫は、以前外界で見付けた奇妙な男に幻想郷の未来を託そうと決意して…。サークル「友毒屋」様の名作同人誌『幻想郷ノ王』を元にした東方Projectのファンフィクションの筈が、実にややこしい狂った物語の第一作。

予告編／本編1話を読む前に（前書き）

本作品は同人サークル『友毒屋』様の同人誌「幻想郷ノ王」のファンフィクションです。故に作品のネタバレを含む場合がありますので、ご注意ください。

なお、作者である友吉先生には許可を頂いております。

本作品は上記作品のファンフィクションと名乗っておきながら、原作のテイストが殆ど感じられない作品となっております。

また、人によって好き嫌いが激しく分かれ過ぎる作品でもあるため、過度な期待は決して為さらぬようご注意願います。

本編の話によっては紫以外東方キャラが殆ど出てきません。主人公がオリキャラである上に外界在住のため、必然的に序盤は殆ど外界の話になってしまう為です。

あと、本家同人誌終盤にて事件解決へと向かったキャラは魔理沙含め5名ですが、更に2名追加の7名でお送りします。

ついでに本家同人誌はそこそこサービスシーンのある作品なのですが、作者の趣向というか芸風により、流血重視でお送りします。

最後に一言

過度な期待は命取りです。
絶対に止めましょう。

予告編／本編1話を読む前に

―粗筋・幻想郷―

その日、幻想郷は荒れていた。

突如人格が狂ったように暴れ出した森近霖之助は博麗神社を襲撃。早々に博霊霊夢を撃破し洗脳、博麗神社を占拠。

その後事件を嗅ぎ付けた射命丸文をも同様に撃破し、洗脳。

そしてその後、自らの知る「森近霖之助」の崩壊を覚った霧雨魔理沙をも瀕死寸前に追い込むが、射命丸文の部下である鴉によって事件を知り乱入してきた八雲家の面々と交戦。

ここに来て彼の「幻想郷の独裁的な支配」というあまりにもスケールが大きく下らない、そして本来彼が十割方思い付く筈もない目的が明らかとなる。

そして死闘の末に八雲家全員を撃破し、八雲紫の拘束に成功する。八雲紫はここで、森近霖之助が狂った元凶は彼が手にした「三種の神器」であるという結論に辿り着く。

そう、霖之助はこの事件を自らの意志によって起こしたのではなく、三種の神器が持つ神通力と混血の遺伝子によって精神異常に陥り、それを神器に利用され洗脳されてしまったのである。

（神器は人間が手にすれば正気の元に善良な神の力を得る事が出来、妖怪が得ても特に変化は無いが、混血の霖之助は強大な神通力に当てられてしまい精神異常に陥り、そこを神器に付け込まれて洗脳されてしまったのだ）

その頃外部にて森近霖之助は、事件解決の為に動き出した幻想郷の正義達と死闘を繰り広げようとしていた。

そして負傷した魔理沙はアリス・マーガトロイドとパチュリー・ノーレッジによって救助され、二人の協力を得て事件解決へと向かう。しかし事態は思うように行かず、博麗霊夢と射命丸文を洗脳し側近に付けた森近霖之助―否、幻想郷の王は、参戦した7名の内3名を

撃破し洗脳。更なる戦力増強を許してしまう。

拘束されている最中、流石に危機を感じた紫は、偶然外界で見付けたこの危機を脱する為の切り札を幻想郷に呼び込む事を決意する。幻想郷の未来は今、一人の外来人に託された。

―粗筋・外界―

事件より三ヶ月程前の事。

夜間暇だったので外界を覗いていた紫は、偶然にも暴走族の群れを目撃する。

暴走族という人種が想像以上に馬鹿で稚拙である事に呆れ返る紫であったが、集団の内の一人の口にした「禿げ狗^{はげいぬ}」という単語に何かを感じる。

そして暴走族二人の会話を盗み聞きした紫は、近頃外界で「禿げ狗」と称される、暴走族、ヤクザ、不良等悪人ばかりを襲う不気味で醜い得体の知れぬ獣が目撃されている事を知る。

しかも警察や自衛隊もその獣に手出ししたがないというのだ。

外界にもまだ妖怪の生き残りがいるのだろうか？

紫が考えていた時、暴走族の群れに突如乱入して、奇妙な歌を歌いながら舞う男が現れる。

男は暫く舞っていたが、それを一人の暴走族に止められ、今度は大げさな身振り手振りと共に大声で暴走族の批判を始めた。

そして暴走族共の怒りが頂点に達し、男に襲い掛かろうとした時であった。

男は突然屈み込み、全身に力を込めて変貌した。

服は裂け、仮面は砕け、肉体がどんどん膨張していく。

それは全身に毛のない熊かメソニクス目を思わせる、巨大で醜悪な獣であった。

そう、この男こそ「禿げ狗」の正体―超絶個性派ゲーム誌記者・手塚松葉だったのだ。

変貌した松葉は暴走族共を一瞬で喰い尽くすと、瞬く間に人間の姿に戻り、正体不明の力で服や装備品の類までも修復し、暴走族共の所持品で金目の物をあらかた抜き取ると、すぐさまその場から姿を消した。

これを上空から見えていた紫は直感した。

「新しい玩具が見つかった」と。

そして何より、彼女は嬉しかった。

こんなに面白い奴が、外界にまだ居るなどと想像すら出来なかったからだ。

そして紫は松葉の自宅へと、株式会社「ボーダー商事」を名乗り手紙を送る。

それを読んだ松葉は、非現実的な事が書いてあるにもかかわらずその内容を全て信じてしまう。

理由は簡単だった。

化け物である自身は非現実的な存在であるから、妖怪や魔術、異世界が存在していても何ら可笑しくはない。そう思ったのだ。

紫は確信していた。

この男が幻想郷に来れば、きっと自分を愉しませてくれるに違いない。

―そして、時は来た。

森近霖之助の暴走と、自らの敗北。

更に7名中3名を削られた対抗勢力も恐らく長持ちはしないだろう。ならば、物の試し程度に使ってみよう。

外界にいた、あの殺人鬼で盗人で化け物の男を。

そして紫は、化け物・手塚松葉を幻想郷に送り込んだ。

紫からの手紙によって幻想郷の存在を知り、また事件の重大さを知った彼。

しかし、そんな彼に悲劇が起こる。

激戦の最中へと勇猛果敢に突撃していった松葉だったが、その不気味な容姿故にどちらの勢力からか敵対者として認識されてしまったのである。

必死に事情を説明しようにも、変身した状態では言葉を発することが出来ないし、人語を話せても乱入してきた自分の話など誰も聞いてくれる筈が無いだろう。

松葉は仕方なく、両方の勢力を同時に相手にしてやろうと決意した。

ゲーム誌記者・手塚松葉は今、自分とはひと味違った「化け物」だらけの戦場で一人、孤立した。

彼にとつての人生最大とも言える戦いが始まったのだ。

果たして彼は、迫り来る妖怪少女達の猛攻に耐え、この戦争に勝つ事が出来るのだろうか。

―彼の未来は 光か、闇か

予告編／本編1話を読む前に（後書き）

尚、この予告編には本編と違う情報が混じっています。

1話「幻想郷における災害」（前書き）

原作 「上海アリス幻楽団（太田順也）」 《東方Project》
「友毒屋（友吉）」 《幻想郷ノ王前・中・後編》

本文 蠱毒成長中

1話「幻想郷における災害」

今回は幻想郷サイドの話です。

主人公が住む外界メインの話は、殆ど外界のシーンばかりで東方キヤラも殆ど出てこないという事もあるので後回しになります。

―幻想郷―

その日も、やはり幻想郷は平和だった。

白黒魔法使い・霧雨魔理沙は何時も通り香霖堂に顔を出し、大きな布袋に詰まった鉄屑を店主に差し出すと共に、もう一つの用事について話を振る。

「香霖ー、ミニ八卦炉の修理は出来たかー？」

そう、この魔女実は数週間前に主力武装である「ミニ八卦炉」を故障させてしまい、その修理を親友である森近霖之助に頼んでいたのだ。

「ああ。ついでに前よりも強度を上げておいたよ」

和と中の混じったような服装をした半妖・森近霖之助はそう言って、掌に収まるほどの小さな六角形の道具を取り出した。

「んじゃ、こいつは此处に置いておくれ」

大きな布袋を店の片隅に置き、霖之助から八卦炉を受け取ると、魔理沙は言った。

「けど、交換条件がこんな鉄屑で本当に良いのか？」

本当はもっと貴重な鉄屑なんじゃないのか？」

そう言われて一瞬動揺する霖之助。

東方Projectに詳しい読者諸君ならばご存じであろうが、霧雨魔理沙が料金代わりに店に提供している鉄屑を主に構成するのは貴重な外界の品々であり、時としてその中には驚愕の品物が入っていることもあるのだ。

そう、例えばかの有名な「三種の神器」の一つ――須佐之男命スサノオノミコトが出雲・
簸川上ひのかわかみで倒したヤマタノオロチの尾から出てきたとされる剣「草薙くさなぎ
の剣」などもあった。

しかし霖之助は布袋を持ち上げ、言った。

「君にはこの鉄屑が貴重な金属に見えるのかい？」

すると魔理沙は、

「いんや、全然」

「だろ？」

予想通りの反応で安心する霖之助。

魔理沙は店外にて飛び立つ準備をしながら、霖之助に言った。

「ま、いいや。」

また壊れたら宜しく頼むぜ」

「そう何度も壊されちゃ困るが…」

魔理沙が輝かしい尾を引きながら、まるで流星の如く飛び去った後、
霖之助は布袋の中を漁り始める。

「ふう…さてさて今日のお宝は…っと」

そして、金属製で円形の何かを手にとると、ほくそ笑みながらこう
言った。

「お…。」

こ…これは…アマテラスがニギに授けた神器の一つ…『八咫鏡やたのかがみ』

…！！

有り難う魔理沙…

これで三種の神器が全て揃ったよ…」

そう、この時点で「侵食」と「洗脳」は始まっていたのかもしれない。

否、始まっていたのだ。多分。恐らく。正論で考えて。

―数日後・博麗神社―

巫女・博麗霊夢は何時も通り境内の掃除をしていた。

そしてふと見れば、見慣れた男が其処にいた。

外出をするようなイメージなど無く、そもそも外出をするようなイメージを持たない奴だった。

「あら、霖之助さん」

そう、霖之助である。

「やあ、お早う」

穏やかな挨拶を交わす二人。

「どうしたの？」

霖之助さんの方からやって来るなんて珍しい。

雨でも降るのかしら」

そんな霊夢の何気ない一言に、霖之助はあくまで穏やかな笑顔を保ちつつ、言った。

「ああ。」

血の雨が降るのさ」

ヒュンッ

次の瞬間、霖之助は霊夢を隠し持っていた刀で斬り付けようとした。博麗の巫女は接近戦に強い。

突然の事ながらも瞬時に避ける霊夢。

「よく避けたね、霊夢」

「突然、何!？」

「ちよつ!!」

どうしたの!?

霖之助さん?」

突如気が狂ったかのように自らに斬りかかってくる霖之助に、驚きを隠せない霊夢。

それもその筈、霖之助は本来半妖という種族柄人間である霊夢や魔理沙よりは戦闘向きな身体をしているものだが、彼自身面倒で自分の性に合わないからと身体を鍛えたり弾を撃つ訓練のような事は全くしていないのだ。

どうにか安全を確保した霊夢は、空中を舞いながら考えた。

「(私、何か怒らせるような事したかしら?)

心当たりは有りすぎるけど...)」

仮にこの暴拳が彼の怒りから来るとしても、ここまで突然人格が豹変するのはどう考えても可笑しかった。

霊夢が考えている最中、霖之助は刀を振り下ろした。

「これならどうだい?

神器『草薙の剣』」

ザンツ!!

地面に巨大な衝撃派が発生する。

まるで斬撃がそのまま飛来するかのようだ。

「わつと!」

どうにか避ける霊夢。

これは幾ら相手が霖之助でも多少鬼にならなくては。

「取り敢えず落ち着いてもらっわよ…」

霊夢は札を取り出し、それを霖之助に向けて投げつけた。

ボンッ！！

札はまるでパンツァー・ファウストのそれを多少弱体化させたような爆発を引き起こした。

「わ…やりすぎちゃったかも…
大丈夫？」

！？」

煙が晴れ、爆発を受けた霖之助が姿を現した。

シューウウウウウウウウウウウウ…

「ふむ。期待通りの性能だ」

霖之助は直径50cm程の盾のような物を構え、霊夢の攻撃を防いでいたのだ。

更に霖之助は懐から小さな勾玉を一つ取り出した。

「こちらはどうか…神器『やさかのまがたま八尺瓊勾玉』」

ドウッ！！

勾玉は無数に分裂し、独特の起動を描きながら霊夢へと向かう。飛んでくる勾玉をどうにか避け続ける霊夢。

「（くっ…速いッ…！）」

対応しきれなくなり、札を投げ、10以上飛んできた内2つを撃ち落として対処する。

しかし、霖之助も負けては居ない。

咄嗟の瞬間移動で霊夢の背後に回り、下から彼女を切り裂く様に刃を振るう。

ブンッ！

霊夢はそれを咄嗟に避けたため、刀は空を切った。しかし奇々怪々で予測不能の軌道を描いて飛ぶ勾玉は、彼女に迫っていた。

「くっ！」

霊夢はどうにか直撃を防ごうと、かなり上位に属する防御技術「警醒陣」で勾玉を防ごうとする。

ドンッ！

爆発が起こり、煙が晴れる。

すると其処に居たのは、肩を負傷した霊夢だった。

「（警醒陣でも防ぎきれなかった…？）」

「想像以上に素晴らしい…。力が漲って来る…」

霊夢は霖之助に言った。

「何なの、その武器？」

「普通じゃないわ」

幻想郷に普通など存在するのかどうかは別として、誰がどう考えようがこの性能は可笑しい。

すると霖之助は答えた。

「武器ではない、神器だよ。

三種の神器さ。

君も知っているだろ？」

霊夢は驚いた。

「何故そんな物を貴方が…！」

霖之助は襲い掛かりながら言った。

「それは企業秘密さ！」

霊夢は迫り来る勾玉を避けながら問う。

「目的は何なの？」

その神器とやらで私の修行でもしに来たの？

^{あいつ}紫のように！」

霖之助は剣を振るいながらその問いに答える。

「目的の一つはこの神器の性能を試すこと」

斬撃を必死に避ける霊夢。

「くっ…」

霖之助は次に鏡を翳し、巨大な光線を放つ。

「神器『八咫鏡』」

ゴオオオアッ！！

再び防御に入る霊夢。

そこに霖之助はもう一つの目的を明かした。

「そしてもう一つは此処で君を倒し、

博麗神社を手に入れることだ！！」

光線を必死に防御する霊夢。

「くっ…」

何てつまらない冗談…！」

霊夢は光線を防御しきったが、視線の先、既に霖之助の姿は無く、彼は瞬時に霊夢の背後へと回っていた。

「冗談ではないさ」

霊夢は驚いた。

「（私が背後を…！？）」

並の戦闘技術で博麗の巫女の背後を取ることなど、まず不可能だからだ。

さて、ここからが作者の腕の見せ所である。

直後、霊夢は一瞬の内に迫ってきた恐怖故に凍り付いた。

霖之助は左腕を霊夢の頸に掛け、右腕に持った草薙の剣を彼女の顔にギリギリまで突きつけたのである。

もし今の霊夢が少しでも動けば、その瞬間彼女の命は無いだろう。

「……………！！！」

そして霊夢はこの直後、霖之助の言葉に驚愕する。

I become a king in the fantasy village!

（訳：僕は幻想郷の王になる！）」

翻訳は「エキサイト翻訳」による。

「悲鳴も上げないとは…愛嬌が無いね…」

霖之助―否、ここからは「王」と表現するのが適切であろう―は左

腕で少し霊夢の頸を締め付け、顔に突きつけられた草薙の剣の刃を僅かに彼女の白い肌へと当てた。

「ふ…ふざけないでッ！」

霊夢は必死に抵抗するが、何分体格が違いすぎる上に精神的な面も影響して、思うように身体が動かない。

王は彼女の耳元に顔を持っていくと、呟いた。

「…堕ちろ………博麗………霊夢………」

それには卑劣な笑いが含まれていた。

どう考えても霖之助のする事とは思えない。

精神的に限界の来た霊夢は遂に、札で王を攪乱した勢いでその魔の手からどうにか逃げ出した。

眠っていた怒りが頂点に達したのである。

「本気で怒ったわよ！」

そっちがその気なら、本気で相手してあげるわ!!」

「やっと此方の本気を受け取って貰えたようだね」
闘争は再会された。

「神霊『夢想封印』!!」
ドッ!

「神祇『八尺瓊草薙剣』!!」
ゴオッ!

ドオオオオオオオオオ!!

その闘争はまるで、白昼堂々小規模の超新星爆発が怒ったかのようにも見える程であった。

さて、そんな二人の闘争を傍観していた者が、上空に約一名。

「あやややや！」

とんでも無いスクープに出会しちゃったわ！」

鴉天狗の新聞記者

幻想郷最速の女

―そう、読者諸君もよくご存じであろうし、そのうち彼女の旦那様が何人も居られるだろう。

射命丸文、その妖である。

というかスクープどころの問題ではない気がする。

さて、こんな一大事。

天狗は幻想郷の妖怪の中でもかなり強力な存在である。

てつきりどちらかに加勢か、組織に報告するものかと思いきや…

「本当にあの巫女はネタに事欠かない！色々と凄いわ！」

そんな事を言いながら愛用するカメラで写真を撮りまくる文。

博麗の巫女が死亡すれば結界の存在が危うくなり、それは幻想郷消滅にも繋がりがかねない。

よってこの場合この鴉は博麗霊夢に加勢すべきなのだが、それをしていない辺り……いや、何でもない。

「貴方がどうやってこの異変を解決するのか、たっぷり取材させて貰うわ！」

―数分後―

そこには、地に伏した巫女が居た。

全身刀傷だらけの霊夢が居た。

細い右腕をへし折られた霊夢が居た。

右手の中指と小指を切断された霊夢が居た。

両足を刀で貫かれている霊夢が居た。

左横腹を円形に削り取られている霊夢が居た。

完膚無きまでに惨敗した幻想郷の守り手が、そこに居た。

この時文は、生涯最上級の恐怖を感じた。

「そ…そんな…あの巫女が負けた…！？
完膚無きまでに…！！」

恐怖と共に、文は事の重大さを改めて知った。

「スクープなんてもんじゃないわ…。

これは…

幻想郷中を揺るがす…大事件…！！」

体制を立て直し、一刻も早く本部へと向かおうとする文。

「一刻も早く大天狗様に報告しないと…！」

しかし、敵も間抜けではない。

王は瞬時に文の眼前へと回り込んでいた。

「おや、何処へ行くんだい

まだ皆に知られるのは少し不都合があるのだがね」

純粋な恐怖を感じ取った文は、瞬時に方向転換してその場から逃げようとし、王もその後を追う。

文は名実共に幻想郷最速の女であったから、王の追走から逃げられるとばかり思っていた。

しかし、その考えが甘かった。

「（幻想郷最速のこの私が…追いつかれる！？）」

これ以上の逃走は力の無駄であると悟った文は、王を迎撃しに掛かる。

「塞符『天上天下の照國』！！」

「三神器『天孫光臨』！！」

ド　　ン！！！！

弾幕は相殺されたかに思えたが、現実違った。

「ふん。

君もこの程度か…」

文の首根っこを片手で掴み、そう吐き捨てた後投げ捨てる王。

地に伏した文は、最後の力を振り絞って、部下の鴉に希望を託した。

鴉は文のメモ用紙を銜えて飛び立つ。

しかしそれを王が見逃す訳もない。

「無駄な足掻きを」

勾玉による集中攻撃で追いつめられる鴉。

しかし、そんな王もまた油断していた。

「!？」

ドゴッ！

八咫鏡によって防がれ、砕けたそれは、直径4mを超える程巨大な陰陽玉であった。

鴉を取り逃がす王。

「ちいっ」

驚くべき事であろう。息を切らしながらも巫女が立っている。

ほぼ瀕死の重傷を負いながらも、霊夢は生きていたのだ。

「まだ動けたのか。」

流石は博麗の巫女だ」

全く持つてその通りである。

全身剣や勾玉で散々痛めつけられ、右腕はへし折られ、更に右手の指も二本失っている。

更に両足に剣を刺され、左脇腹は怪物に食い千切られたかの如く円形に削り取られている。

仮に息があっても、苦痛で立てない筈だ。

「狂っているわ…。」

きつと、貴方は何か巨悪な異変に取り憑かれている…」

「僕は正気さ」

そう言うと、王は地に伏した文の左腕を踏みつける。

「幻想郷を愛する貴方が何故こんな事を…」

幻想郷に混乱を招きたいの？」

霊夢の問いに、王は答えた。

「混乱を招かないために僕が支配するのさ」

王の答えとは、本来彼が「森近霖之助」であれば到底言い出すはずのない狂言だった。

本当に彼が森近霖之助であるなら、こんな事は如何なる場合でも言う筈が無い。

王は文の腕を踏み躪りながら更に続けた。

「絶対的な力で世界を支配する。

それが男の欲望。

男の性というものだ」

霊夢は重体のまま立ち上がり、札を構えてこう言った。

「ならば貴方という異変を、

全身全霊を以て退治致します」

王もまた、それに答えるように言う。

「ならば全身全霊を以て、

君という障害を乗り越えて見せよう」

闘争は繰り返されるものである。終わりはない。

「『夢想天生』!!!」

「真神器『天叢雲剣』!!!」

音は無く、閃光だけが其処にあった。

結果、その場で立っていたのは王であった。
王は霊夢を見下ろしながら言った。

「此れが神々のもたらす力か…
君の御陰で幻想郷の王たる力を証明出来たよ。

ありがとう、霊夢」

霊夢は、恐らく未だこの恐ろしい事件勃発に気付いていない親友の身を案じ、思った。

「（気を付けて…魔理沙…）」

—ほぼ同時刻・幻想郷の何処か上空—
文に遣える鴉が取った決死の行動は、無意味に終わらなかった。

「これは…前代未聞の大事件かしらね…」

鴉を右手に乗せ、メモ用紙を左手に持ちながら、全体的に胡散臭く毒々しい紫と高貴な金の空中に浮いているそいつ—八雲紫は言った。
「私の霊夢に手を出すなんて…あの男」

「紫様…」

側に浮く、優雅な獣の尾を持ち、気高い金の尾と知的な藍を持った紫の忠実な部下—八雲藍は紫に話しかける。

「Yes . War e f f o r t s , R a n

（訳：ええ。戦争の準備よ、藍）」

—そしてこの事変は、瞬く間に幻想郷中に広まった。

「（やはり此処なら幻想郷が一望出来る。」

僕の野望には必要不可欠な場所だな）」

と、そんな王の元へと何者かがやって来た。

「おや？」

僕の神社に何の御用かな？

お客さん」

穏やかな態度の王に対して、やって来た「客」は強気に答えた。

「ふざけんな香霖。」

霊夢は返して貰うぜ！」

白黒魔女、霧雨魔理沙参上である。

さて、これからどうなっていくのか。

それはまた、次の次の話で（多分

―それより数ヶ月前・外界―

電気屋のTVで流されているニュースは、その事件をまたも大々的に取り上げていた。

『次のニュースです。

あの日本中を騒がせているUMA「禿げ狗」が遂に神奈川県で目撃されました。

昨日15時37分頃、神奈川県平塚市高麗山で知人とハイキングをしていた60代の男性が、森の中で人の死体のような肉塊を貪っている謎の動物を目撃した模様です。

目撃者の証言によりますと「全長3m程で全身に毛が無く、目は赤く光っており頭が大きく、信じられないほど高い運動能力を持って

いた」との事で、専門家はこの証言から、男性が目撃した動物が「
禿げ狗」であると確定し、市警は協力して市民に注意を呼びかけて
いく予定との事です』

1話「幻想郷における災害」(後書き)

次回は外界に暮らす主人公の話です。

2話「外界における惨劇」(前書き)

ひとまず物語は一度外界へ。

2話「外界における惨劇」

―事件より何ヶ月も前の幻想郷・八雲邸―

紫は最近、何とも言えないほど暇だった。

結界管理は優秀な式神であるバケギツネの藍とバケネコの橙の2匹に任せておけば何ら問題はなかったし、嫁か娘感覚の巫女や婿か弟感覚の半妖を弄くりに行くのも面倒だ。

冥界の友に会いに行く気も起きなかったし、神出鬼没の友など探すのがまず面倒だ。

かといって他にやる事もなく、大きく面白そうな異変や事件の気配も全くない。

「…暇ね」

こんな事では1200年以上付き合ってきた自分の身体が腐ってしまふ。勿論比喩的な意味で。

というか退屈だ。退屈な事この上ない。

何か暇潰しになるような事は無いかと、久々に外界を覗いていた。いつも通りに流れる日常。

幻想郷と違った面も確かにある事は有るが、基本は大して変わらなかった。

その日覗いていたのは、西の方にある土地、神奈川県。

ひとまず弾幕なり妖術なりで警察官が暴走族でも適当に弄くって遊ぼうと思ったのだ。

そう思うと彼女は、空間の境界を改竄し、そこに裂け目を作ると、その中に入っていた。

―外界・神奈川県某所―

そいつらは夜の町を他人の迷惑も知らずに爆走していた。

読者諸君の中には詳しい方も居るだろうが、神奈川県には暴走族が多いと聞き、そもそも治安が悪いのだそうだ。

県警の不祥事も多く、それをネタにした芸人も居る程だ。相当なのだろう。

今現在公道を爆走していた厚顔無恥で馬鹿な連中も、紛れもない暴走族であり、現在神奈川県どころか国内でもかなり名を馳せる集団らしかった。

ちなみに現在は道端で休憩中である。

「いよつしやアアアアアアア！！！」

今夜は絶好調だぜえええ！！」

先頭を爆走していた如何にも凶暴で低脳にしか見えない顔つきの男は、高らかにそう叫んだ。

「小沢さん…大丈夫なんですか？」

この辺にも最近出るらしいですよ…アレ」

隣に佇む肥満男は心配そうに隣で叫ぶ男―小沢に話しかけた。

「何だ峰崎？幽霊でも出るってか？」

豪快に笑いながら答える小沢。

しかし峰崎はそれと対照的に続けた。

「そうじゃないッスよお！」

小沢さんだつて名前くらい聞いたこと有るでしょ？

禿げ狗ですよ、ハ・ゲ・イ・ヌ！」

「禿げ狗…？」

ああ、あのヤクザだの暴走族だのばっかり襲ってるっつーバケモンだろ？

お前あんなの信じてんのか？」

禿げ狗。

近頃日本各地で目撃されているUMAの類で、その名前の由来はな
んと言つても外見にあった。

シルエットは巨獣そのもので、全長は3mに及び推定体重は100
kg以上。

体毛を持たず野球ボール程の目は全体的に赤く光り、鋭い牙の並ん
だ巨大な口を持つ事から肉食と考えられている。

また動作は機敏で五感も凄まじく怪力のため、象をも喰らうとさえ
考える者もいる。

オカルトマニアにとっては浪漫であり、一部の人間には驚異となつ
ていた。

その一部の人間とは、先の会話でも出たように、ヤクザ・暴走族・
不良・通り魔・強盗・ストーカー等、民間人にとっては近寄り難く
不快で邪魔な存在とされる人種であつた。

どこにでも現れ、人食いであるが、そのターゲットが上記のような
人種のみであるが為に、一部の民間人からは快く思われ、また崇拜
する物もあり、ネットではその手の連中が徒党を組んでいる事もあ
つた。

警察機関も相手が人間ならば逮捕出来るが、獣の殺人は管轄外だし、
その他公的機関もこの奇妙な食性を持つ不気味なUMAのような訳
の判らない物に手を出すような事はしたくなかつた。

「信じてるも何も…俺のダチん中にもあいつに殺られたのが居るん
スよ…」

「大丈夫だつて。」

大体なあ峰崎、バケモンが怖くて走つてられんのか？

手前の覚悟はそんなもんかよ？」

「…」

黙り込んでしまう峰崎。

「まあそりゃ、サツどころか自衛隊も手出し出来ねえんじゃあ仕方

無えがよ。

俺等の覚悟はそんなもんじゃねえだろ？

俺等は命がけで走ってんだ！

毎日毎日、バイクのメンテも全力で、走るのも全力で！命かけて！
禿げ狗だか何だかしらねーが、そんな奴如きに俺達が負けるかって
んだ！」

小沢はそう叫び、それに伴って他の暴走族達も雄叫びを上げる。

それを空高くから覗いている者が居た。

そう、我らが八雲紫である。

―スキマ内部―

「暴走族…思っていた以上に低俗で馬鹿な連中ね…。

もう少し面白いかと思っていたのだけれど…とんだ期待外れだった
わ…。

でも…禿げ狗って何かしら…？

あの小僧共は化け物とか言っていたけど…まさかまだ完全に忘れ去
られていない妖怪が…？」

紫は観察を続けた。

―外界・神奈川県某所―

暴走族の集団に、近寄る影一つ。

その男は長身でロングコートを羽織り、帽子を深く被って仮面まで
付けていた。

男は暴走族の集団にある程度近寄ると、両手を広げてミュージカルの
俳優の様に踊りながら「芥川龍之介の河童」のメロディーに乗せ
て歌った。

「It is the one that completely
has and admits .

(全くもって認めたくないものだ。)

I want never to admit even if
it dies as such a party is the
same Japanese as me etc. or i
t ruins.

(こんな連中が自分と同じ日本人であるなど、死んでも滅んでも絶
対に認めたくはない。)

Will so much will be it cruel
and the reality be sad?

(現実とは、そこまで非道で悲しいものなのだろうか?)

Does the god love me?

(神は我を愛するか?)

Is it true?

(それは真実か?)

What should I do?

(私はどうすればいい?)

What is the justice?

(正義とは何?)

What is the truth?

(真理とは何?)

What is love?

(愛とは何なのだ?)

It is not understood.

(それが判らない)「

啞然とする暴走族共を尻目に、男は鼻歌交じりに舞い続ける。

しかし、その舞を止めたのは、他でもなく小沢であった。

「ナメてんじゃねえぞコラア!」

小沢は男に殴りかかるが、男は彼の拳を右手で受け止め、こう言っ
た。

「これはこれは申し訳ありません。
しかし貴方も貴方だ。

何故急に殴りかかってくるのですか？

普通に、『貴様は何者か？』と聞けば済む筈でしょう？」

そう言われて小沢は益々腹が立った。

だが、口で何か言うより先に、男の腹立たしい言葉がやって来る。

男は小沢の拳を軽く突き放すと、大げさな身振り手振りで踊りながら、大声でこう言った。

「大体暴走族なんてねえ、下らない連中ですよ！

毎日公道をバイクや車で爆走し、馬鹿でかい騒音を辺りに轟かせて五月蠅いことこの上ない！

一般人が真つ当に意見したり、少しでも気に入らないと無差別に暴力を振るい時として殺害する！

その上ろくな職も持たず金ばかり使って自分勝手に生きている！

社会という一つのコロニーで、これほど身勝手なカストは他に有り得ない！

馬鹿馬鹿しいにも程があるとは思いませんか！？」

暴走族共の怒りはついに頂点に達し、今にも男へと襲い掛かろうという時、男の様子が急に変わった。

「要するに、だ。

お前等はもうこの世には不要つて訳でな。

つまり死んでも殺されても、滅んでも滅ぼされても、一切文句は言えん訳だよ。

自分らでそれ相応の事をしてきたんだからな、それが当然なんだ。

まあそう考えれば、俺も死が妥当つて事になるがよ…人間社会は矛盾だらけだしな…つっわけで」

男は前屈みになり、全身に力を入れた。

「命乞いなど聞かれると、まず思ふなよ？」

そう言うと、男は変貌した。

コートの背は破け、仮面は碎け散り、肉体が徐々に膨張していく。暴走族共が恐怖の余り凍り付いている間に、男は巨大な獣へと変貌を遂げた。

体毛のない身体、鋭い牙と眼光、大きな頭、強靱そうな顎と四肢。それら全ての特徴は、一般的に知られる禿げ狗の情報と見事に一致していた。

平常でないのは暴走族共ばかりではない。

スキマ内部に居た紫でさえ、驚きと嬉しさで溢れていた。

―スキマ内部・紫―

「何て事なの!？」

外の世界にこんなに面白い奴が居るだなんて知らないし見たことも聞いたことも無いわよ!？」

何て事態なのかしら!？」

是非とも幻想郷に誘い込んでみたいわ!

否、絶対に誘い込むのよ!

何があっても!如何なる手段を用いても!

でも普通の手段じゃ面白く無いわ!何か良い手段は無いものかしら?」

生後1200年越えて、そのスタイルもはや美しい成人の女として出来上がっている紫。

大抵の事には動じない筈である。

それが今となつては、新作のオンラインゲームを始めた学生が、自身の分身となるキャラクターを創る際、どうしようかと嬉しそうに迷っているようだった。

―外界・神奈川県某所―

その場の光景をどう言い表せば良いだろうか。
少なくとも、平穏で平和的な光景とは言い難かった。

辺りは暴走族共の血で紅く染まり、ありとあらゆる骨肉がそこら中に飛び散っていた。

そしてそこに佇むのは、一匹の醜い獣。

全身に毛のない熊の様な怪物。

ゲーム誌記者、手塚松葉―陸生獣型UMA・禿げ狗の正体である。
若干32歳の独身で一人暮らし、恋愛より面白いものを見付けたので年齢〓彼女居ない歴の等式が成り立つ男。

有名なオンラインゲーム雑誌の名物記者であり、彼の書くコラムはその過剰に個性的な作風と数々の専門知識によって成り立っており、人気が高い。

体格、顔立ち、髪型、服装。

性格以外はどれを見ても普通の民間人だが、彼にはある秘密があった。

そう、彼は人間ではないのだ。

一般的に言えば人狼と呼ぶのが適切だろうが、その姿は一般的なイメージとは違っていた。

全身に体毛が無く、全長3m、推定体重100kg、鰐のように巨大な頭に紅く光る眼、強靱な顎には大きく鋭い牙が無数に生えている。

まるで毛のないメソニクス目のようだ。何とも気色悪い。

さて、

手塚松葉には自身が「ESPの類」としてしか認識していない「能力」が有った。

それは飛行や魔法行使のようなファンタジックなものでも、運命支

配や境界支配のような強大なものでもない。
そんな格好良い物であるはずがない。

身に纏う程度有能力

響きだけは格好良いが、要するに破れた服や破損した装備品を修復したり、服の汚れが取れるだけである。

空気を纏って水中や火災現場でも酸素を確保したり、油を纏って身体に点火し、火達磨状態で突撃するといった芸当も出来たが、そんな事をする機会もそんなに無かった。

それよりも重要なのは、服である。

松葉が禿げ狗に変身すると、必然的に服が破損してしまう。身体のサイズや体格が違いすぎるのだ。

破損といっても、多少破れたり汚れたり穴があいたりというものではない。

一度破損するともう原型を留めていない只の布きれ共にまで成り下がってしまうのである。

こんな布きれを身に纏っていたのでは、もはや何とも言えない。

恐らく猥褻物陳列罪で警察の御用であろう。只でさえ何人も殺しているのに。

この辺りの暴走族は飯が貧相だな。

そう思いつつ、松葉は自分の家代わりである銀のワゴン車へと戻っていた。

一方上空で松葉の様子を観察していた紫は、紙と筆を執り、手紙のようなものを書いていた。

―翌日・手塚松葉―

取材で神奈川への出張が決まったゲーム誌記者・手塚松葉はその日、愛車の後部座席で目を覚ました。

ふと見れば、腹の上に封筒が乗っている。

郵便番号などは無く、美しい文字で「禿げ狗様」とだけ書かれている。

「俺宛…だと？」

鍵かけたよな？

窓も閉めたる？

どこにも入るスキマなんざ無えよな？

何がどうなってやがる？」

松葉はとりあえず自分宛と思われる封筒の中身を出してみた。
手紙の内容はこんなものであった。

―
初めまして、禿げ狗様。

昨晚貴方様の活躍を拝見させて頂いておりました者です。

昨晚の貴方様の活躍は、とても素晴らしいもので、私はこうして手紙を書いている今でも感動が止まりません。

さて、挨拶もここまでで本題に移らせて頂きたく思います。

まず信じがたい話とは思いますが、私はこの世とは別の世界に住む者です。

その世界は名を幻想郷と言い、忘れ去られた妖怪や神々の住まう地であります。

貴方は見たところ、人の姿をしておられますが人ではないように思います。

（表記が面倒なので中略）

貴方の力は素晴らしい。

私は貴方の力を是非とも借りてみたいと強く思っていますので、力が必要であると考えた場合は貴方を無理矢理此方側に引き込むかもしれないが、その時のお礼はしっかり致しましょう。

尚、貴方様がこの手紙を怪しいと思ったのなら、捨ててしまってくださいません。

御返事は封筒に入れて23：50頃にワゴン車のフロントガラスに貼り付けておいて頂ければ勝手に取らせて頂きます。

株式会社・ボーダー商事社長

八雲紫

↓

松葉はこの手紙の内容を、とりあえず信じることにした。

自分自身という存在がそもそも非現実的で非常識で非日常的だといふのに、異世界や魔術や妖怪変化を信じずしてどうするのかと、そう思ったのだ。

ひとまずその日はそのままワゴン車を走らせ、目的地である民家へと向かった。

彼の出張は、言い換えれば取材旅行のようなものだ。

近頃人気爆発のアクションゲームがあり、その神業的プレイ技術を持ち、大会で優勝したプレイヤーが、何故か神奈川に集中している。

松葉の目的は、彼らの取材と対談。

松葉は正直この取材が面倒だったので、スカイプやスティツカムを

使って対談してはどうかと編集長に相談したが、必死に頼まれたので断れなかった。

そうしてこの日も松葉は無事に仕事を終え、ワゴン車の後部座席で飯を食って眠った。

フロントガラスには、手紙への返事を入れた封筒が貼ってある。

手紙には「面白そうだ。全力で協力したい」とかそんな事を書いた。

明日になれば出張も終わり、自宅に帰る事が出来るだろう。

これで何事もなければ、全てが順調に進む筈だ。

3話「幻想郷での闘争」(前書き)

暴力描写がより一層強くなります。

3話「幻想郷での闘争」

―事件より一週間前の外界・松葉―

あの後、松葉は暫く八雲紫という謎の経営者と手紙のやりとりをした。

自宅に戻った後、彼女の手紙は家の郵便受けに入っており、自分の手紙もそこに入れた。

その後は紫から届けられる様々な書物によって幻想郷について深く理解し、その対価として松葉は手紙によって外界の詳しい情報や、身の回りで起こった面白い出来事等を書いた。

松葉は顔も見えない相手と紙でやりとりするのもどうかと思っていたが、次第に紫が自分と気の合う女であると思うようになった。

そして手紙のやりとりが暫く続く中、一週間が過ぎ、事件勃発の日
は近付いていた。

―幻想郷・博麗神社・王、霧雨魔理沙―

「香霖、お前に聞いておきたいことがある」
そう言つと魔理沙は、

「何でこんな事をしたんだ？」

王に詰め寄りながら

「お前の目的は何だ？」

弾丸のように言葉を発していく。

「霊夢は無事なのか？」

しかし王は、

「質問の多い奴だな」

瞬時に鳥居へと飛び移り、

「そんなに知りたければ」

勾玉の発車準備を終え、撃ち出すと共に叫ぶ。

「力尽くで聞けばいい！」

魔理沙は驚いた。

あの戦闘に向かない、戦を好まない筈の霖之助が、まさか弾を撃つなど思っても見なかったからだ。

しかしそこは高速の魔女。

勾玉の追撃をどうにか避け続ける。

「（くっ…何て弾幕だ！）」

そして、王へと突撃しながら叫んだ。

「ったく、お前と戦う事になるなんて、思いもしなかったぜ！

行っけえ！

魔符『スターダストレヴァリエ』！」

全力で突撃した筈が、王には余裕で避けられてしまった。

王は言った。

「僕は今でも魔理沙と戦いたく無いんだけどね。

君の事は好きだからね」

王は自らの肉体が霖之助である事を巧みに利用し、魔理沙を墮としにかかると。

しかし魔理沙は、八卦炉を構え、主砲を放ちながらに叫んだ。

「ふざけんなッ！」

ズドン！

大爆発が起こる。

これでは王と神器はどうなるうが良いとして、鳥居が壊滅するので無いだろうか。

しかし、煙が晴れた鳥居には、草薙の剣を構え立つ王の姿があった。本来防御に特化していないと思われる草薙の剣でさえこの耐久性である。

魔理沙は王が持つ剣を見て、驚いた。

「！？」

その剣は……！？」

魔理沙は草薙の剣に見覚えがあった。

王は言った。

「思い出したかい？」

君が拾ってきて、僕が霧雨の剣と名付けたものさ」

王は魔理沙に向け、斬撃を飛ばす。

ズバッ！

「んなっ！？」

斬撃の波動は魔理沙に避ける暇すら与えない。

ガッ！

「うわぁっ！？」

波動は魔理沙に直撃し、簾から墜落。
しかしどうにか地面に着地する。

「いてて…」

鳥居の上に立つ王は、剣の他に鏡と勾玉を手元に浮かべながら言った。

「剣だけじゃない。

この神器は全て君の拾いものさ」

「なっ…何だとッ…！？」

驚く魔理沙を尻目に、王は瞬時に魔理沙の背後へと寄り、言った。

「素敵なプレゼントを有り難う…魔理沙」

そう言う王は、魔理沙の背に草薙の剣を突き刺した。

「…ッ！？」

魔理沙は苦痛に顔を歪めるが、王は尚も続ける。

「心配要しなくていい。

臓腑には掠りもしていないからね」

「なッ…何してんだ…香霖……」

王は魔理沙の顎を掴み、苦痛に歪む彼女の顔を覗き込みながら言った。

「君には感謝している、と言っただろう」

王は魔理沙の胸に刃を外側に向けて刺さった剣を、徐々に身体の外側へと、ゆっくりと、動かしていく。

「僕の女になるのなら、君だけは見逃してやっても良い」

魔理沙は一瞬自我を失いかけるも、刃の根本を掴むとそれを勢いよく引き抜き、怒りと共に己の魔力を波動として全身から解放した。

「その手をどけるッ！」

空中に逃げる王。

「おつとオ…」

「幻滅したぜ…お前はもう香霖じゃない。

（もう私の知っている香霖じゃ…）」

魔理沙は背と腹を貫通して開いた穴から血を流しながら、高らかに叫んだ。

「私の所為でお前がこうなっちまったんなら、お前を死ぬ気で止めてやる！」

魔理沙は足下に魔法陣を展開。

三二八卦炉を構え、叫んだ。

「何があつたのか知らねえがッ！」

言い訳はお前を打つトバしてから聞いてやるぜッ！」

「ほう…君の本気も見せて貰おうかア…」

王は上空で剣と鏡を構える。

八卦炉に、強大な魔力が溜まっていく。

キユイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
ン！！

「（だから、あいつの目を覚まさせるだけの…有りつ丈の力をツ…
！）」

それは既に焼き殺すだけの力だという突っ込みを、私はあえてしよう。

しかし、それほどに魔理沙は必死なのだ。

コオオオオオオオオオオオオオ！！

「全身全霊エエエツ！」

「魔砲『ファイナルマスタースパアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアク』ウウウウツツ！！！」

ツバオオオオオオオオオオオオオ！！！！

王はそれを、直径が身の丈程に巨大化した鏡で防ぐ。

「んぬっ！」

魔理沙の全力に耐え切れず、ついに八卦路に亀裂が入る。

ビシッ…パキッ！！

ミニ八卦炉は緋色金製であり、かなりの強度を誇るはず出有る。

それがここまで壊れてしまうのだから、魔理沙が如何に必死なのか、お察し頂けると思う。

「くっ…」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
あああああああああああああああああああ！！」

ドン！

大爆発が起こり、息を切らしながら地に伏す魔理沙。
ミニ八卦路も既に木っ端微塵である。
しかし案の定、王は無傷であった。

「ふむ…君も所詮この程度か…」

ミニ八卦炉もあれほど壊すなど言ったのに…」

魔理沙は最後の力で王に掴みかかるが、逆に両手を捕まれてしまう。
王は魔理沙の頸を掴み、動脈に爪を立てる。

「魔力を失った君など、只のか弱い少女でしかない」

王は頸を掴んだ手へ更に力を入れ、爪もより強く突き立てる。

「ツツツツ…やめ……………ろ……………」

と、その時であった。

上空に星の瞬きにも感じられる輝きが一瞬見えた後、王めがけて何かが飛んできたのだ。

ドオオン！！

幸いなことに魔理沙は、また残念なことに王も直撃を免れた。
上空には、3匹の化け物の影があった。

「漸くお出ましか…」

毒々しい紫と高貴な金色―大妖怪、八雲紫
知的な藍色と気高い黄金―九尾狐、八雲藍
愛らしい橙と頭上の若草―バケネコ、ちえん橙

毒々しく高貴な大妖怪は、王に言った。

「御機嫌よう霖之助さん。」

博麗神社を乗っ取ったくらいで幻想郷の王気取りかしら?」

王はそれに答える。

「判っているさ、八雲紫。」

君を倒して漸く僕は真の王になれる。

思えば君には何時も見透かされている気分で苦痛だったよ。
でも、僕の本性までは見透かすことが出来なかったようだね」

「It is so .

I did not think that you were
a man vulgar like this .

(訳：そうね。

貴方がこれほど低俗な男だとは思いませんでしたわ)」

闘争は開始された。

紫はここで松葉を呼ぶという手も考えたが、それで戦力になる前に
決着がついた場合エネルギーの無駄にしかならないと考え、今は2
匹の式と共に王を倒そうと思った。

「（本当に私がこの男の本性を見透かせなかったのか…？
或いは彼を操っている第三者が存在するのか…？

どちらにせよ此奴はここで殲滅しなくてはならない）」

ブンッ！

3匹は王を囲み、王の周囲に無数の時限起動型弾幕が現れる。

「逝きなさい…幻巢『飛光虫ネスト』」

ギョオッ！

動き出した時限起動型弾幕は王へと飛来し、大爆発を起こす。

しかし王は、爆炎の中からどうにか抜け出す。

このチャンスを逃す程、紫は甘くない。

「結界『光と闇の網目』！」

逃げる王に無数の弾幕が飛来する。

と、ここで王は最初に八雲家で一番弱小な橙を狙う。

「神器『草薙の剣・一の太刀』」

襲撃に混乱し、対応不可能となる橙だが、若い部下を見捨てる程、
紫は冷酷ではない。

ズバァッ！

王の斬撃は空を切った。

紫が空間を裂き、橙を逃がしたのだ。

「ちいつ！」

紫は王の隙を突き、愛用する日傘で頭蓋骨を叩き割ろうとする。

ガキッ！

しかし、打撃は草薙の剣によって見事に防御されてしまう。

ここに来て、八雲家の総攻撃が始まった。

まずは橙。

「鬼符『青鬼赤鬼』！」

更に藍。

「式神『前鬼後鬼の守護』！」

決め手に紫が空中で法円を展開して放つ。

「境符『四重結界』！」

ドドドドドドドドドドドドッ！

王目掛けて、無数の弾幕が降り注ぐ。

「ぐおおおおあッ！」

そして太陽のような閃光。

流星の王ですら、これでは一溜まりも有るまいと、そう思って王に視線をやる紫。

しかし、彼女は驚愕した。

「ふう……」

王は鏡と剣によって弾幕を防ぎきり、未だ無傷で居たのである。

「（想像以上ね……」

あれだけの弾幕の中、殆どダメージを受けていない……」

だが、勝てない相手ではない！）」

3匹は再び王へと弾幕を放つ。

「方符『奇門遁走』！」

「式輝『狐狸妖怪レーザー』！」

流石の王もこれでは弾幕の処理に困ってしまう。

「流石に3対1ではきついな……」

王はここである、秘策を出すことにした。

と、王は紫に背後を許してしまう。

「罔両『八雲紫の神隠し』」

空中に無数の弾幕が現れる。

ドグアンツ！

「（手応えが……無い？）」

と、ここで紫は何者かに隙を突かれ、撃墜される。

ボンッ！

「紫様！？」

弾を撃った者を見て、八雲家一同は驚愕した。

「「「霊夢！？」」」

そう、あろうことが紫を攻撃したのは、嘗て共に異変解決へと向かった博麗霊夢だったのである。

よく見れば、王を介抱している射命丸文の姿もある。

「驚いたかい？」

これが僕の切り札。

三種の神器のもたらす『天下を取る程度の能力』の能力が一つ。

敗北者のみを対象とした肉体・精神における完全支配の能力だ。

この能力には、例え何者であろうとも逆らうことは敵わない」

紫は王を睨み付ける。

「これで3対3だぞ？」

さあ、どうした？

まだ此方の人数が増えただけだぞ？
かかってこい！戦ってやる！

弾を撃て！

式を仕向ける！

とつと空に浮き上がって、僕を殺しに来い！

さあ、戦はこれからだ。
よる

早く！
ハリー

早く！早く！
ハリー

早く！早く！早く！
ハリー

幻想郷を賭けた戦いはこれからだ！
おたのしみ

早く！早く！
ハリー

「そうね。

貴方には死より恐ろしい制裁をくれてやるわ…。

果たしてどちらが幻想郷の王に相応しいのか、決着を付けましょう」

紫は最後にこう吐き捨てた。

「貴方、此処から笑って帰れるだなんて思わない事ね…ぶち殺すわ
ミックス
雑種」

——同時刻・外界・松葉——

暴力団幹部の頭を噛み砕きながら、禿げ狗は毛のない自らの肌で感じられる僅かな闘争の気配に興奮気味だった。

3話「幻想郷での闘争」(後書き)

次回あたりで禿げ狗が漸く幻想入りだと思えます。

4話「Beastが里にやってくる」(前書き)

六千字に収まったのが自分でも奇跡です。

4話「Beastが里にやってくる」

―幻想郷・王、八雲紫、博麗霊夢、射命丸文―

彼女は只、拘束されていた。

四肢を幌金縄―西遊記にて、金閣・銀閣が所有していた絶大な拘束力を誇る神具―によって拘束され、まるで中途半端に吊られるような形で、拘束されていた。

ソファ―に座す王は、あざ笑うように言った。

「良い眺めだよ、八雲紫。」

流石の君も、その幌金縄からは逃れられまい」

しかし八雲紫は、それに対して余裕があるようにこう答えた。

「ふふ…こういうプレイも嫌いじゃないわ…」

「くふはははっ…その威厳が何処まで持つだろうね？」

君が僕の支配下に堕ちるのも最早時間の問題だというのに。その上、ご自慢の式共も再起不能と来ている。

君も見ただろう？

幻想郷の王の絶大な力を！」

式共々敗北し、拘束されるに至る自らの光景を思い出す紫。

「（ふふ…藍と橙には悪いことしたかしらね…）」

王は紫の右腕目掛けて釘を投げつける。

釘は紫の右腕を貫通し、彼女の白く細い腕を壁に打ち付けた。
「っ…！」

思わず苦痛に顔を歪める紫。

幾ら妖怪の生命力が高いと言っても、痛覚は等しくやってくる。

「本当に良い眺めだよ……」

更に王は右ポケットからかなり旧式の大口径拳銃を取り出し、紫の脚を撃ち抜く。

紫の全身に更なる激痛が走る。

銃弾ならば昔身に受けた事があるが、今回与えられた苦痛は度が違いすぎる。

「見様見真似で行った祝福儀礼済みの純銀製銃弾だ……」

その様子では効果があるのかどうか判り辛いな……」

そう言くと王は、撃ち抜いた紫の脚の、しかも傷口の上を靴を履いた状態で思い切り踏み付ける。

しかもそれだけで止まらず、何回も踏み付けたり、徐々に踏み付ける力を強めたり、或いは踏み付けた状態で脚を捻ってみたりもする。そうして行くと遂に紫も限界を感じ、苦痛に顔を歪め、か弱い声を上げた。

「くひはっはっはっ……実に気分が良い……これは最高だ……」

「目的の達成も目前に迫っているからね。」

そろそろ僕の真の目的も教えてあげよう」

王は自らの狂信的な目的を遂に語り出した。

「僕の真の目的……それは幻想郷の完全な独裁支配。」

及び博麗結界の解除により外界へも攻撃を仕掛け、外界をも僕の支配下に置く事だ。

そしてその為には……八雲紫、君の『境界支配』の能力も必要不可欠

であるという事さ」

「そんなッ…つまらない事の為にッ…」

「外と行き来が自由に出来る君には到底判らないだろうよ」

更に王は紫の頸を掴み、彼女の頭を上に向け、少し締め付けながら彼女の顔を覗き込み、言い放った。

「Only it is man's great Rickie
Lee Jones！」

（訳：それこそが、男の偉大な浪漫というものだ！）」

紫は此処まで来て、王が既に森近霖之助でない事を悟った。

「（漸く判ったわ…逆に今思えば何故気付かなかったのかしら…。

この男も、只神器の力に支配され、気が狂っているだけ…。

小さな野心が、神器の魔力によって大きな満身へと変えられていた
だけののね…）」

さて、此処に来て刃物を片手に霊夢と文が現れる。

「さて、と…そろそろ堕ちて貰おうか…八雲紫」

苦痛に耐えながら、紫は願った。

「（後は…あの子達を…。

あの子達を信じるしか無い…）」

—マーガトロイド邸・「魔女」三名—

霧雨魔理沙は柔らかく清潔なベッドの上で目覚めた。

「此処は…何処だ？」

「魔理沙!？」

「やっと目が覚めたのね!？」

そう言つて駆け寄つてきたのは、アリス・マーガトロイドとパチュリー・ノーレッジ。

あの後、魔理沙はこの二名に助けられていたのだ。

「ほんと心配したんだから！」

「待て待て。何が何やらさっぱりだぜ」

「それはこつちの台詞よ！」

急にアンタが降ってくるんだもの、びっくりしたわ！」

「そうか…私はあの時香霖にやられて…紫に助けられたのか…」

ここで魔理沙は、二名の魔女に疑問をぶつけた。

「手当ては二人がしてくれたのか？」

「当然じゃないの。感謝しなさい」

「エリクサー三つも使っちゃったんだから」

エリクサーとは錬金術における薬の事である。

錬金術の苦手なパチュリーのことだ、恐らく何処かで他の錬金術師から買い取ったのだろうが、3本とは確かに高額である。

果たしてエリクサーが不良品だったのか、魔理沙への傷がそこまで深かったのか。

真相は謎で良いと作者は思う。

大体二人とも魔法使いという歴としたバケモノの血筋なのだから、エリクサーよか魔術媒体の秘薬や治癒魔術の方が圧倒的に高性能とすら思えるわけで。

「二人とも有り難う。助かったぜ」

純粹な笑顔で礼を言う魔理沙。

「べ…別に良いわよ」

「お代は後で請求するわ」

あまりの純粹さに思わず目をそらしてしまう魔女二名。

さて、魔理沙は起きあがると、言った。

「じゃ、行くか」

しかし賺さずアリスに止められる。

「ちょ、待ちなさいよ！」

何処行くつもり!？」

すると魔理沙は答えた。

「香霖の目を覚ましに行くに決まってるだろ。

あいつの禍々しい魔力はまだ消えてない」

しかし、それを易々見送るほどアリスもパチュリーも馬鹿ではない。

「無茶よ!」

「どれだけ叩きのめされたか判ってるの？」

穴の修復だつて結構苦労したのよ!？」

「主に私が!」

しかし魔理沙はそれに冷静に返す。

「一人じゃ無理なのは判ってるぜ…」。

だから二人にも付き合つて貰うぜ」

「付き合つ!？」

思わず赤面する二人。

つてか手前等アレか、思春期の中学生かエロい考えしかない若い女

か。

「まあ、魔理沙一人じゃ荷が重すぎるしね
とはパチュリー。」

「但し、ちゃんと借りは返すのよ？」
とはアリス。

そして魔理沙はそれにこう答える。

「私が借りた物を返さないなんて事があったか？」

それに対する答えは冷酷であつた。

「有るわよ」

「さ。そうと決まれば作戦会議ね」

「火力だけで勝てる相手じゃないのよ」

「それは身に染みてるぜ。」

（待つてろよ、香霖。

今度こそ目を覚まさせてやるぜ）」

―外部・王、博麗霊夢、射命丸文、「従者」四名―

そいつらは向かい合っていた。

北東の空には王、霊夢、文が。

南西の空には咲夜、鈴仙、妖夢、早苗が。

「もう少しで八雲紫も墜ちるとい^{あのい}うのに…邪魔をしないで貰えるかな？」

「そうは行きません！」

紫様を連れ戻すように言われてきたんです！」

とは、剣士。

「家の姫様の許可もなく好き勝手に暴れ回るの、やめて貰えませんかね？」

幾ら月の出身だろうが、今私たちが住んでいるのはこっちなもんですから」

とは、兎。

「私は何時もお世話になっているお礼に馬鹿な真似を止めてあげようかと」

とは、侍女。

「幾ら新参とは言え、黙って見ていただけというわけにも行きませんからね」

とは、風祝。

侍女、十六夜咲夜は更に続ける。

「あと、紅魔館の周囲に雨降らすのも止めて貰おうかしら」

「気付いていたか…。」

異国の吸血鬼は僕の神器と相性が悪く、厄介だからね。

まあ、良い。

ついでだ。

君たちも僕の奴隷に仕立て上げてやるとしよう。

この娘達のように」

言葉は無かった。

咲夜はナイフを三本、鈴仙は銃弾型弾幕を数十発放つ。

それに対し霊夢と文は素早く四名の背後に回り込む。

四名の意識が集中しているその「今」を、王は逃さなかった。

鈴仙の背後に回り込み、彼女の背から腹を素早く手刀で貫き、頭を思い切り殴って気絶させる。

更に瞬時に方向を変えると、早苗の頭目掛けて勾玉を発射する。

早苗は徐々に巨大化する勾玉にどうにか対応しようとするが、勾玉の奇妙な軌道に対応しきれず、鮫か何かに食われたかのように腹に大穴が空いた。

更に、二人の身体に出来た傷は瞬時に治り、洗脳された二人は王の元へと向かう。

「さて…これで二人、僕の奴隷に加わった訳だ」

「何て…非道な…」

「原作の方も酷い事にはそうですが…まさか…こんなッ…」

侍女と剣士が状況を思わしく思っている最中の事である。

幻想郷に、何か巨大なモノが流れ込んだ。

それは八雲紫によるものであった。

そう、危機を感じた紫がついに切り札を投入したのだ。

― 同時刻・外界・松葉 ―

その日休日だった松葉は、前日の疲れも有ってか、かなり長い時間眠っていた。

しかし突然、彼の自宅の下に巨大なスキマが開き、眠っている松葉を家ごと丸飲みにした。

そうして松葉は、自宅ごと幻想入りを果たしてしまったのである。そして松葉は目を覚まし、とりあえず手元にあったドライカルパス

を頬張りながら私服に着替える。

ふと見れば、テーブルの上に不振な革製スニーカーがあり、その上には一羽の鴉がとまっている。

それを見て松葉は特に追ひ払う出もなく、窓を開け、鴉に語りかける。

「おうおう鴉よ。

こんなさびれたおっさんの部屋にやあ何もありやせんて。
なあ。

じゃけえ早う出た方がええて。

なあ」

松葉は「というか作者もなのだが、家の中に迷い込んだ生き物は抵抗の場合殺さず、語りかけながら逃がしてやるという妙な癖があった。

しかし、幾ら誘導しても鴉は微動だにしない。

それどころか、人語を喋り出した。

「これはこれは偉大なる手塚松葉様、お初にお目に掛かります。

私は紫様の使いでやって参りました、式神の前鬼と申します。

本日は紫様が突然幻想郷に呼び出してしまい、申し訳ありません。

しかし、事は一大事なのです。

どうか鴉が突然喋りだしたとか驚かずに聞いて下さい」

松葉は色々と混乱しそうになったが、ひとまず前鬼を名乗る鴉の話を聞くことにした。

——鴉説明中——

「成る程。

つまり俺は今家ごと幻想郷に居て、森近のアンちゃんがイカれて暴れ回ってる。

んで正義のスーパー共がどうか止めようとしてるけど、四人居た内半分ほどスーパーヒロインちゃんがやられっちまってるわけだな？で、俺にお呼びがかかったと」

朝食としてみそ汁とインスタントの焼き蕎麦と玄米を食べながら松葉は言った。

「はい。」

その上、今の松葉様には紫様のお力によって既に空を飛ぶ力があります。

簡単に空中浮遊が出来るでしょう」

前鬼は食パンを啄みながら答えた。

「そして、紫様からのもう一つの贈り物がこちらです」

前鬼はそう言うのと、脚でスーツケースの鍵を外し、嘴で開いた。

入っていたのは蛍光塗料的な緑色にぼんやり光る液体の入った小さな瓶であった。

「薬か何かか？」

「はい。何でも知人の薬師様に制作を依頼し、入手なさった秘薬であるとか」

「用法と効能は？」

「飲み薬です。一気に全て飲み干さなくては真の効果が発揮されないとか。」

効能にしましては、『生物へと瞬時に進化を与える薬』であるとか何とか」

「成る程」

松葉はそう言うのと瓶を開け、中身を一気に飲み干した。しかし、何も起こらない。

「何も起こりませんね」

とは前鬼。

「いや、変身後に何かあるのかもしれない」

「ああ…なんか凄い事になってそれで怖いですよ」

「まあ大丈夫だろ、社長だし」

「紫様であるからこそ不安なんですよ…」

「……………まあ良いや。」

「んじゃ、早速化けてみるぜ」

そう言つて松葉と前鬼は外に出る。

松葉は早速変身を試みた。

変身は無事成功したが、何かが違う。

「松葉様…それは一体…」

「安心しろ鴉君。俺にも何が何だかわかんねえから…つか、俺変身後は口聞けねえ筈なんだがよ…」

「それも薬じゃありません？」

松葉の姿を説明すると、以下の通りである。

元々獣型であつた体格は寧ろ人型に近くなり、身長は約2・3m。

両腕は一応指など残っているが、飛竜のような翼があり、空を上手く飛べそうだった。

しかし何より松葉が驚いたのは、変身後なのに人の言葉を話せるという事であつた。

変身すると声帯までも獣のソレになつてしまふ為、今まで人の言葉が話せなかったのだ。

「…まあ良いや。」

「んじゃ鴉君、俺行つてくるわ」

「お気を付けて」

松葉は初めて得た翼を上手く羽撃かせて飛んでいった。

そして、醜い獣と正義と王とは、上空で遭遇する。

―上空―

「僕は高見の見物をさせて貰おう。
八雲紫との戦いでそれなりに消耗しているからね」

そう言うと王は、洗脳した霊夢・文を咲夜と妖夢に仕向け、残る早苗と鈴仙を自らの護衛につける（自身の戦闘能力が馬鹿高いというのである）。

霊夢、文VS妖夢、咲夜の闘争が始まった。

今思えば『STGにおける4ボスであり単体自機経験者であり主人公経験者』と『STGにおける5ボスであり自機経験者であり剣士であり従者』という事になる。

さて、まず向き合うは霊夢と咲夜。

咲夜はナイフを構える。

「霊夢：貴方に罪はないけれど、全力で殺らせてもらっわよ」

咲夜はそう言うと、時間を止めた。というか字イ違エだろーがよ侍女の長。

その瞬間、侍女以外の全てが、制止した。

「傷魂ッ…『ソウルスカルプチュア』!!」

ザンッ！

洗脳された巫女は一瞬で力尽き、墜落した。

それを悟り、流石に危機を感じ始めたが、これで終わる訳がない。

素早く弾を撃つ文に向け、妖夢は刀の柄に手を掛ける。

「剣伎ッ…『桜花閃々』!!!」

ザンッ!

洗脳された天狗もまた一瞬で力尽き、墜落していく。

「ほう…」

やはり霊夢と文も昨日の戦いでかなり消耗していたか…」

王は仕方なく弾避けに使う予定だった鈴仙と早苗を二人に仕向けようとするが、南南東に何らかの気配を感じ、振り返る。

そこには見慣れた3名が居た。

まずは人形遣い、アリス・マーガトロイド

次に七行魔女、パチユリー・ノーレッジ

そして我らが魔法使い、霧雨魔理沙

「今日もお客が多いね。」

昨日あれほどやられて居ながら今度は何をされに来たんだい？」

「お前をタチの悪い悪夢と腐った幻覚から覚ましに来たんだぜ…今度こそな…!」

淡々とした語り口ながら、両者には巨大で恐ろしい敵意が有った。

「ふん…そんな雑魚を連れてきた所で勝てると思っているのかい？」

「へへ…今回は取って置きの秘策って奴があるんだぜ」

「秘策？」

「ははっ…笑わせる」

次の瞬間、王の背後に何者かが現れ、王の後頭部に拳を振るう。

「矮小な戦略など、圧倒的に巨大で絶大的な力の前では無力そのものごへあつ…！」

「………！？」「………」

その場に居た正義5名と被害者2名の計7名は、予想だにしない出来事に一瞬慌てた。

殴られた王は空中で多少バランスを崩すが、何ともなかったかのように体勢を立て直すと、怒りを込めて叫んだ。

「誰だッ！？」

この偉大なる幻想郷の王、森近霖之助に不意打ちを仕掛けるような戯け者は何処のどいつだッ！？」

すると何処からか声がした。

「あア？」

気付かねえのか又ケサク共が。

俺だよ、とんでもなく哀れなイケメンのアンちゃんに、馬鹿で噛ませ犬のキャンワイィ嬢ちゃん方ア！

今丁度北北西の空に浮かんでやがる、どうしようもねえ腐れ外道の化け物野郎だよ！」

王と、正義達は声の主が示す方角の空を見て驚愕した。

そこには外来人らしき服を着た、巨大で筋骨隆々でぶよぶよした毛のない肌と、目つきの悪い肉食獣の頭と、蝙蝠の腕を持った人型の

化け物が居たからだ。

そう、我らが主人公こと手塚松葉である。

松葉は言い放った。

「王だか神だか何だか知らねえがよ、俺は大切なツレの女社長に頼まれてんだわ。

そこなアンちゃん死なねー程度に、思い切って撲つ殲コロスしてくれつてなア！」

4話「Beastが里にやってくる」(後書き)

多分、次回で完結…しない(5/6)

5話「王座」(前書き)

もうちょっと、続きます。

5話「王座」

―幻想郷・とりあえず何名か―

上空へと唐突に現れた松葉の姿を見て、王と被害者達と正義達は驚愕し、沈黙した。

その場の沈黙をいち早く破ったのは王であつた。

「死なない程度に殺す…？」

戯言を！

全く馬鹿げている！

博麗の巫女や天狗の力を以てしても傷一つ付かないこの僕を、只の妖獣如きが殺す！？」

王は大声で笑い出した。

「勝手に言つてろ…。」

何、直ぐだ。

手前ブツ締めて社長助けられりや、俺はそれで満足なんだからよ」

そう言つて、王と松葉が戦闘態勢に入ろうと言つとき、松葉は背後に気配を感じ振り返る。

見れば妖夢が刀を振りかざし、今にも松葉を切り裂こうとする。

「断迷剣『迷津慈航斬』！！」

しかし、松葉の対応は早かつた。

ガギン！

（！？）

その光景を見て、松葉以外の誰もが自らの目を疑った。
妖夢が振るったのは楼観剣。

一振りで幽霊十匹に相当する殺傷能力を持つ刀である。

普通なら、ここで松葉は真つ二つにされてしまう所であろう。

刀を受け止めようにも、結果は同じはずだ。

しかし、何と言うことか。

楼観剣は見事に止まっていて、幾ら妖夢が力を込めようとビクとし
ないのである。

松葉が妖夢自身を拘束したのかと予想される読者の方もいらっしや
ると思うが、そんなものでは断じてない。

楼観剣の刃が、見事に松葉によって止められていたのだ。

そう、彼の顎で。

松葉は楼観剣の刃を、口に銜えて歯で止めていたのだ。

しかしそれだけで終わりではない。

松葉は妖夢が楼観剣を離さないのを良いことに、自らの頭を大きく
振り回して、妖夢を投げ飛ばしたのだ。

グオウン！

元々身が細く体重も軽い妖夢は遠くへと吹き飛ばされてしまつが、
どうにか体勢を立て直す。

しかし何だか手元が軽い。

見れば楼観剣が無い。松葉がまだ銜えたままなのだ。

妖夢が硬直する中、松葉は楼観剣を右手に持ち替え、言った。

「何のつもりだア、剣士？」

すると妖夢は答えた。

「…黙りなさい、化け物！」

大体貴方の様な怪しい奴を、この場の誰が信じると思つのですか！
？」

すると咲夜も続く。

「少なくとも初対面で貴方を信じろつてのは無理ね」

続いてアリスが嘲笑するように。

「その口調と目付きじゃあねえ」

それに便乗したパチュリーも。

「せめて全身に毛を生やして来なさい。話はそれからよ」

決め手は魔理沙の一言。

「要するにお前、見方ぶつてるけど実は敵だろ？」

どのみち香霖あいつの神の力が目的なんだろ？」

結論：魔理沙側は松葉を完全に敵として認定。

そして妖夢は、此処で自身の怒りをぶちまけた。

「それと楼観剣を返して下さい！それは貴方が持つような物では有りません！」

松葉は右手の剣に目をやり、妖夢の方をじつと見ると、言った。

「OK、確かにこいつは俺みたいないな外道が持つべきモンじゃねえな。」

心配すんな。
直ぐ返してやるから」

そう言つて松葉は楼観剣の持ち方を変えると、それを妖夢目掛け、刃を向けて全力で投げつける。

咲夜は時間を止めて妖夢を守ろうとするが、投げられた楼観剣の速度は彼女の目で捉えられるものではなく、また彼女の能力発動よりずっと早くに妖夢の左脚を貫いた。

ズブシューアッ！

「…ッッ…」

妖夢が仲間に心配される中、松葉は言った。

「OK。お前らの俺に対する考え理解した。
というわけだ、剣士。」

左脚に見事穴ア空いちまったがよ、運が悪かったと思つてくれや」
それに対し、妖夢は答える。

「…無論ですよ。」

というか、それがどうしたんです？

まだ片足に穴が空いただけじゃないですか…片足に穴が空いた程度
でしょう？

幽々子様の護衛役を務めるんですから、その位は当たり前だと心得
ているつもりですよ。

寧ろ私の祖父であり恩師であるお方なんて…きっとそれ以上に過酷
な目に遭つていた筈です。

だから…だからこそ…ここで貴方なんかには、只の化け物如きに引き
下がるようでは、まだまだ未熟者なんですよ！

それどころか、今こうして…楼観剣と白楼剣を握って戦う資格自体無いに等しい事なんです！」

妖夢は左脚に突き刺さった楼観剣の柄をしっかりと握り締めると、引き抜きながら吐き捨てた。

「来なさい化け物！」

私達を殺しに！

私達に殺されに！」

正義達の中に、「勝手に代表者を気取るな」等と思った者は居なかった。

居る筈が無かった。

さて、そんな名場面に空気を読まずに突っ込んでくる者が居た。王である。

「君達…そいつを倒すのも良いが、僕は空気扱いというわけかい？それはそれで都合が良いのだけれどね」

答えたのは松葉であった。

「んな訳あるかよ為り損ない。」

こいつら処分し終わったら…いや、もうどうでもいいか。手前等まとめて相手してやらア！」

「へえ。」

初対面だと思っていたが、中々威勢の良い奴だな。化け物。

咲夜、妖夢。

香霖はお前等に任せませ！」

二人の剣士はそれに頷く。

そう言うと魔理沙は松葉に向けて右手を向け、アリスは人形に構えの指示を出し、パチュリーも詠唱を始める。

まず松葉に襲い掛かるのは魔理沙の光線。

ズツ… オオオオオオオオオオオオオオオオ！！

更にアリス、続いてパチュリーのスペルカード攻撃が続く。

「偵符『シーカードールズ』！！」

ドッ！

四方八方に散らばる計6体の人形が持つ球体から、細い光線が無数に松葉目掛けて一直線に伸びていく。

「火水木土金符『賢者の石』！！」

長さ1m程の水晶五本がパチュリーを囲むようにして現れ、それぞれが違った色の光線を松葉に向けて放つ。

松葉は頭上で腕を罰点に組み、脚を縮めて翼と背で身体を守り、光線の猛威から身を凌ぐ。

一方その頃、王と王に洗脳された被害者と対峙する、妖夢と咲夜はというと、洗脳された鈴仙・早苗と必死に戦っていた。

まずは鈴仙と対峙する咲夜。

普通、直にこいつと戦う際は、「瞳」に注意しなくてはならない。

波長操作の能力を持った鈴仙の瞳を見た者は、精神異常に陥り忽ち正気を失ってしまうからだ。

しかし、咲夜にその心配はなかった。

何故か？

永夜異変の際、彼女はこの地球外の兎を初めて相手にしたことがあったのだが、その際彼女はこの瞳の罠に何故か掛からなかったのである。

故に、瞳の事は一切心配せずに戦えた。

鈴仙の撃ち出す銃弾型弾幕も、元々動作の素早い咲夜にとって回避が困難な筈がない。

次に早苗と対峙する妖夢。

奇跡誘発の能力により天候を操るスペルカードが存在し、STGにおいて5ボス認定という事もありかなりの強豪である。

しかし、彼女は外来人だ。それも人間なので年齢も外見通り。

それに比べて妖夢は半人半霊なので老化が非常に遅く、人生経験も豊富かつもりであるし、幻想郷の基本もよく理解している。

何より実戦経験も早苗よりずっと豊富なのだ。

そんな相手に負けるほど、妖夢も未熟ではない。

松葉によつて左脚を貫かれても居たが、そんな怪我如きで引き下がるほど、妖夢は臆病ではないし、王に幻想郷を奪われるくらいならこの場で必死に戦つて死んだ方が、彼女にとってはマシだった。

闘争は思つ以上に長引き、妖夢と咲夜も段々と疲れ始めていた。と、その時である。

今まで微動だにしなかった王が、無数の勾玉を遂に分裂させたのである。

「墜ちろ！」

墜ちろ！

墜ちろ！

堕ちて、滅びろおっはっはア！」

個々が複雑な軌道の元に飛来する勾玉は、既に歴とした弾幕と呼べる代物になっていた。

闘争に集中していた二人は突然の事態に驚きつつも防御態勢に入るが、被害者である二人―鈴仙と早苗―は哀れにも飛来した無数の勾玉に被弾し、墜落していった。

尚も降り注ぐ弾幕に耐え続ける咲夜と妖夢。

「（な…何て早くて重い弾幕なのッ…」

霊夢達はこんな奴と…）」

と、ここで二人は反撃に打って出る。

「断迷剣『迷津慈航斬』！」

ズバツ！

「銀符『シルバーバウンド』！！」

ビュン！

斬撃と無数のナイフは王に降り注ぐ。

「嘖ッ！」

しかし王はそれを鏡によつて余裕で防ぎきる。
ギンッ！

咲夜は気付いた。

「（幾ら時間を止めても当たらない…！？

否、例え当たったとしてもダメージが無い…ッ！！）」

と、ここに来て妖夢が楼観剣と白楼剣を手に王に斬り掛かり、王もそれに反撃する。

「断霊剣…」

「真神器…」

「『成仏得脱斬』！」
じょうぶつとくだつせん
「『天叢雲剣』！」
あめのむらくものつるぎ

ズガギヤアン！

三つの刃はお互いの威力を相殺したかに思えたが、妖夢が圧倒的に押し負けていた。

妖夢はあれほど強く握り締めていた楼観剣と白楼剣を手放し、墜落していく。

その隙を王は逃さず二人に追い打ちを掛ける。

「真神器…『真経津鏡』！！」

ズドアツ！！

鏡から発せられた光線が、妖夢と咲夜に直撃し、地面を丸ごと削り取る。

「もう終わるかい？
実につまらない…」

地面に降り立った王は、咲夜の元まで歩み寄りながら言った。
咲夜はナイフを手に王へ向かっていくが、次の瞬間。

「つまらないと…言っている」

ズブ…

「
:
ツ
!
?
」

地面に落ちていたのはナイフであった。
弾かれたのではない。

王が居合いで咲夜の左手の腱を切ったのである。腱を切られれば、腕は完全に動かなくなる。

「……つつあああああつ！」

暫くしてその痛みに気付き、苦痛と恐怖に涙を流しながら左手を押さえる咲夜。

一方の妖夢も力尽き、地に伏したまま微動だにしない。

「…ッフヒツ…ッファッハッハッハッハッハッハッハッハアア
！！！」

（おぼろげに、そのときを思い出して）

これがア？

切り札ア？

護衛役ウ？

何だこの弱さは！

何だこの脆さは！

これは酷い！

全く持って酷すぎる！

とんだ茶番だ！茶番劇だ！

まるでお話にならないイ！

[illegible]

もはや声質や人格、口調すら豹変し、王は内面における森近霖之助としての性質を完全に失った。

そこにあるのは、森近霖之助という一半妖、一混血児の肉体を借りた、紛れも無い只一匹の汚れきつた生物と呼ぶ氣すら殺ぐような存在であつた。

「どうしたア、霧雨魔理沙ア！？？」

森近霖之助を取り戻すんじゃねえのかア！？

言っとくが、俺はもう森近霖之助じゃねえぞ!??

三種の神器の一：八咫瓊勾玉。

それが俺の本体よ……。

だが只単に勾玉だの八尺瓊だのと呼ばれるのは俺としちゃ癪なんだな…。

これからは、そうだな……よし！

レガリア
王権だ！

これから俺は王権と名乗る！

俺が王権を持つんじゃないえ……俺自身が王権そのものだ！」

王改めレガリアの言葉を聞いた魔理沙は、光線の射出を止め、怒りに打ち震えた。

アリスとパチュリーも、それまで松葉に集中させていた意識をレガリアに向け、松葉も防御態勢を解いて引き下がり、色のついた粒子を身に纏って身を隠す。

見れば地面には倒れたまま動かない妖夢と、動かない左手を押さえながら静かに涙を流す咲夜の姿。

魔理沙は叫んだ。

「ふざけるな！」

自分の軀も持たない癖に、何が王権だ！^{レガリア}

お前、最低だな…最低だよ、お前！この…ド外道野郎！」
するとパチュリーも続く。

「店主がどうだろうと私は思わないわ…でも、今は別…」

貴方、咲夜を…咲夜をよくもあんな目にツ！

絶対に許さないわ…何が何でも、貴方だけは消し潰してやる！」

二人の熱意に、アリスは戸惑いながらも、無言でレガリアを睨み付ける。

「ヒィハハハ…手前等、威勢良いなア…！」

良いぜエ…威勢が良くて気の強エー雌^{オンナ}ほど、ブツ締め甲斐のある生^モ物は無エ！」

卑劣に高笑いするレガリアに対し、魔理沙は言い放った。

「Coming, and heresy.

(訳：来い、外道。)

It destroys it.

(訳：滅ぼしてやる。)

するとレガリアは嬉々とした表情で言った。

「Oh how wonderful it is!

(訳：おお、何と素晴らしいことか。)

It is not what man also still
threw away.

(訳：人間もまだ捨てたものではない!)

It will go, and both of the wi
tch!

(訳：行くぞ、魔女共!)

Raise the scream of the pig!

(訳：豚のような悲鳴を上げろ!)

そう言うのとレガリアは瞬時にパチュリーの背後へと回り込み、彼女の背から腹にかけてを草薙の剣で瞬時に貫き、瞬時に引き抜くと、背中を思い切り蹴飛ばした。

哀れ、墜落していくパチュリー。

状況の急変から、戦闘態勢に入ろうとする魔理沙とアリス。

そして自分の出る幕ではないと思い待機する松葉。

アリスは人形を構え、レガリアに向け光線を放とうとするが、レガリアの反応はそれよりもずっと早く、勾玉で全ての人形を破壊すると、口から細い光線を発し、それによってアリスの腹を撃ち抜く。

更に瞬間移動でアリスに接近し、彼女の腹を思い切り殴ってから地面に叩き落とす。

「アリス！パチュリー！」

魔理沙は鋭い視線でキツとレガリアを睨み付ける。
もはや松葉の事など眼中にない。

睨み付けられたレガリアは、余裕でこう言った。

「悔しいか？悔しいだろうな。

なら来いよ！

早く来い！

八卦炉が無え今現在、手前に残されてるのは持ち前の魔力と体力だけだろうがよ！」

「言われなくてもな、行つてやるよオ！！

彗星『ブレイジングスター』！！！」

ギョオオオオオオオオオ！！！！

星形弾幕を撒き散らし、箒に乗った魔理沙は驚異の速度でレガリア目掛けて突進する。

ドンッ！

大爆発が起こる。

しかし案の定、レガリアは鏡によって無傷であった。
だが、レガリアの顔は笑っていない。

寧ろ、何かを残念がっている様子である。

「…これが…手前の秘策か？」

正直、がっかりなんだがよ…」

しかし次の瞬間、レガリアは魔理沙の手元を見て驚愕する。

「いや、ガツカリなのはこっちだぜ。

レガリア。

何たって、コイツを盗られて気付かないなんてな」

魔理沙の手元には、何と草薙の剣が有ったのだ。

「んなッ…！ テメエ…何時の間にッ！」

「いや、訂正しよう。

盗んだんじゃない。借りただけだぜ。

何、ちゃんと返してやるさ。

お前を消し去った後、お前の身体にな…！」

流石は東方界限随一の窃盗常習犯、霧雨魔理沙である。

「おいこらナレーションっつーか作者、借りてるだけだっつってんだろ。

窃盗常習犯とか人聞きの悪いこと言っな」

と、個々でレガリアが呟いた。

「…返せ…。

そいつア、俺の剣だあああああ…！」

飛びかかってくるレガリア。

「おいおい…取り乱しは負けフラグだぜ？」

それとな、レガリア…お前は知らないだろうから教えてやる。

こいつは香霖が『霧雨の剣』って名付けてくれた、私の剣だぜ！』と、ここで原作と同じく黒い波動を放とうとした魔理沙であったが、突如狙うべきレガリアの姿が空中から消えた。

「！！！！？」

畜生！

何処だ！？

何処にいる？レガリア！！」

レガリアは逃げも隠れもしなかった。

ただ、魔理沙の背後にいたのである。

「おいおい…俺の名演技も見破れねえのかよ…？」

あとな…本人が借りてて後で返しますだの言っけてもなア…」

レガリアは鏡を構え、中央にエネルギーを溜め始める。

そしてそれを光線として放つと同時に、常識レベルの教訓を言い放った。

「相手に何も伝えずに借りていったらよオ、そりゃ相手にとっちゃ盗まれたのと同義だろ！！」

魔理沙は為す術無く光線を全身に受け、草薙の剣を手放して墜落していった。

その様を見て、レガリアは更に叫ぶ。

「そのぐれえ常識だろうがこの馬鹿女アアアアアアアアア！」

ーッという。

久々に叫んだから喉痛えや」

レガリアは地面に降り立つと、辺りを見回しながら言った。

「ふい…紅白系のボンクラ共は一通りブツ締めたな。

んであの八雲つつーオンナ雌もそう長くはねえ。

と

す

る

と

他の連中が動き出すのも時間の問題だアが…今すぐ襲い掛かってくる可能性があつて、なアにより特筆すべき障害つつたらあと一つしかねーよなア…。

おい、バケモン！此奴等ぶっ倒れたからもう問題無えぞ！

幾ら空気読むからってステルス気取って隠れ潜んで居ようがな、犬畜生と血の臭いとその気配だきやファ。リーズでも消えねーよ」

その時であつた。

レガリアが叫んだ方角の景色が次第に揺らぎ、ペンキが剥がれ落ちるかのようにして、段々と青白い肌色が現れる。

そしてそこから現れたのは、今の今まで隠れ潜んでいた松葉であつた。

「やはりバレていたか。

いやな、あの戦場に俺が居ては邪魔なだけだと思つたまでだ。何よりやることも無かつたわけだしな」

レガリアは足下の地面に突き刺さっている草薙の剣を引き抜くと、言つた。

「そうかよ。

そりゃご苦労君だ。

ほら、取れよ。

お前もあの八雲つつー雌^{オシナ}助ける為に来たんだろ？
じゃあ俺とは敵同士ってわけだ。」

そう言うのとレガリアは松葉に草薙の剣を投げ渡す。
松葉はそれを上手く受け止めると、言つた。

「本気で帝王目指してる外道が、態々ハンデかよ。
それとな、獣人は基本武装しねえで戦うのがセオリーだと思つてんだよ、俺。

持つても精々ナイフくれえだろうという認識の元に生きてるからな」
するとレガリアは言った。

「ハンデってわけじゃねえ。

大体俺が本気出しゃ奪い返すのなんざ訳ねえしな。

あと、その凶体じゃ草薙^{ソイツ}の剣すらナイフに見えるぜ」

「そうかよ…。

んじゃ、行くか！」

「応！」

こうして二人の、最終決戦が始まった。

5話「王座」(後書き)

もつちよつと…続くんじゃないぞい…

6 話「終戦の賛歌」(前書き)

完結編。

色々グダグダです。

6話「終戦の賛歌」

―前回より・松葉、レガリア―

魔獣と魔王の決戦が始まった。

まず先手を切ったのはレガリアであった。

「真神器『天叢雲剣』！」

しかも、王が媒体である草薙の剣無しに発動不可能であった天叢雲剣を、なんたる媒体も無しに振り回している。

しかし松葉も負けては居ない。

彼は絶大な威力を持つ天叢雲剣に対抗する防御手段を既に持ち合わせているのだ。

「装盾『生きている鎧』！」

ザンツ！

プシア！

レガリアの攻撃に出血する松葉。

しかし、松葉は一切それに動じない。

レガリアは言った。

「…斬れてねえが…何をやった？」

すると松葉は答えた。

「全身の筋肉を瞬時に硬直させ、その馬鹿でかい刃を防いだだけだ」

「ほお…面白え」

「次はこっちから行くぜ…。

手前にゃ悪いが、俺もとっとと家に帰って寝てえんでな…。

禽獣『E』!」

松葉は右腕に力を溜めると、レガリアの眼前へと瞬時に飛び移り、彼の腹を殴って叩き上げる。

ドゴウア!

「つぐ…!」

更に叩き上げられたレガリアの隙を、松葉は見逃さない。

「さて、これで終いだ…。

叩き割れ!

『手塚の剣』イイイ!」

ドンッ!

どす黒い波動が剣から放たれ、レガリアに襲い掛かる。

しかし、ここで意識を取り戻したレガリアは鏡を構え、それに対抗する。

「真…神……器……真…経……津鏡』オオオ!」

ドオア!

鏡から白い光線が放たれ、それらは空中でぶつかり合う。

それを地上で見守っている者が居た。

王の洗脳から解放された霊夢である。

霊夢は物語序盤で洗脳されてしまった為、松葉の存在を知らないし、レガリアの存在も当然知らなかった。

しかし、突如目に入った異様な化け物が王―レガリアと戦っているのだ。

彼女は只ひたすら、心の内で松葉を応援し続けた。

「（頑張りなさいよ…わけわかんない変な奴…！）」

そんな霊夢の思いも露知らず、松葉とレガリアは戦っていた。

「（畜生…これじゃキリ無えや…）」

どうすっかなア…。

どうすんのが正しいかなア…。

もう、良いか。

全力振り絞っても…良いか…」

松葉は無言で、右手に持った草薙の剣―否、手塚の剣を大きく振った。

ゴアアッ！

どす黒い波動は剣を離れ、白い光線を飲み込みながらレガリアに迫る。

レガリアは、純粋な力比べでの、松葉への敗北を確信した。

「俺……の……負けかア……」。

だが……よ……バケモ……ン……まだ……まだ終わって……ねえか……ら……
……な……」

八咫鏡は砕け散り、レガリアはそのまま地面に叩き付けられた。

ズオウン！

洗脳から解かれた被害者達と意識を取り戻した正義達は、一瞬何が起こっているのか全く判らなかった。

―直後―

空に浮かぶ松葉。

「さて…これで終わってくれりや御の字なんだがな…」
下では意識を取り戻した者達が何やら色々と話合っているようだが、今の松葉にとってはどうでも良かった。

さて、所変わって此方は地上。

霊夢と魔理沙が何か話し合っていた。

「そういえば霖之助さんは大丈夫かしら？」

「まあ…大丈夫なんじゃねえの？」

無事じゃないだろうがな。

ちなみにあいつの人格は本当の香霖じゃなくてレガリアとかいう奴が乗っ取ってたらしいぜ」

「レガリアねえ…」。

ところで今の内に残りの神器も回収しとかないと…」

と、霊夢は地に伏した筈の霖之助の肉体の方へ目をやって、凍り付いた。

「あ……まさか…そんなッ……」

其処には全身が黒く染まったレガリアが居た。
驚いた魔理沙は思わず叫んだ。

「レガリアッ!？」

何があったか知らないが、お前やられた筈じゃ!？」
レガリアは答えた。

「おうおう…手前等よく頑張ったよ…」。

あのバケモンに本気出されて剣取り返す間も無く鏡まで叩き割られ
つちまつたんだからなア…。

さっきなア流石に死ぬかと思っただぜ…。

あと手前等、あのバケモンに感謝しとけよ…魔理沙がやられつちま
つたら、そいつ無しじゃ俺の一人勝ちだったんだからなア…。」

アリスとパチュリーは全身の震えが止まらない。

「有り得ない…。」

「何て執念なの…。」

「剣盗^ギられたばかりか鏡までぶっ壊れ、この身体もあと三日でオシ
ヤカだろうがよ…。」

今の手前等ブチ殺すのなんざ、別段難しいことじゃねえ…。

俺が…俺こそが幻想郷の王権^{レガリア}だ！」

そう言つとレガリアは、自らの胸板を右手で突き破り、心臓の位置
から本体である八尺瓊勾玉を抉り出し、空高く掲げる。

「神器『八尺瓊勾玉・解』！！」

それはさながら超新星爆発を感じさせ、全てを滅ばし去るかのよう
な、音のない光だった。

そこに、精気を感じさせる者は、レガリアと霊夢以外に存在しな
かった。

空中に浮いていた筈の松葉すら、何事も無いかのように消えていた。

「あと…あと一息なのにッ…」

満身創痍の霊夢は既に、直立することさえ憊ならなかった。

「残念…俺の勝ちだ」

レガリアは此処で勝利を確信する。

その確信が直ぐに崩れるとも知らずに。

レガリアの背後に巨大な目玉の寄り集まった裂け目が現れる。
しかしその中から現れたのは、紫ではなく松葉であった。

「No, the loser is you still.

(訳：いや、敗者はやはりお前だよ。)」

霊夢とレガリアは共に驚く。

まず霊夢は、スキマから現れたのが紫ではなく松葉であったとい
う事に。

次にレガリアは、勾玉の光の巻き添えによって死んだと思っていた
松葉が生きていたという事に。

「んなッ…!?」

「アンタ…!?」

「殴打『猩々怪腕』!!」

松葉はレガリアを両腕でどつき上げると、直ぐに彼を上空まで追いかけて、最後の攻撃を仕掛ける。

「Mr. Regalia and duty hardships.
Good-bye...」

(訳：レガリア殿、任務ご苦労。さようなら...。)

禽獣『Mystic's ugly beast』!

(訳：神秘主義者の醜い獣)

松葉自身が弾幕のエネルギーを纏い、巨大な弾丸となってレガリアに突撃する。

ドゴォッ!!

上空にて、スキマから上半身を出した紫はその光景を見ながら言った。

「ふう... スッキリしたわ」

そして地面には、ボロボロになって横たわるレガリア―否、森近霖之助の姿。

レガリアの本体である八尺瓊勾玉も、跡形もなく碎け散っている。

弾丸となって地面に突撃した松葉は、直ぐに体勢を立て直すと、人間の姿に戻り、腹の底から精一杯叫んだ。

「いよつやああああああ!!」

勝ったアアアアアアアアアア!!

死なずに良かったアア!

生きてて良かったアア!

このろくでもない素晴らしき世界にーッ…

カンパアアアアアアアアイツ!」

その後も松葉は適当に一人漫談をしたり踊ったりして喜びを自分だけの為に表現した。

それと時を同じくして、正義達も決戦の終わりを実感していた。

「最後の神器も粉々…これで一安心ね…」

「つて、紫! アンタなんでそんな全身傷だらけなのよ!？」

見れば紫の全身は切り傷、刺し傷、痣だらけである。

「貴方と天狗とあの男にやられたのよ…まあ、全部あのレガリアつて奴の仕業みたいだけどね」

そして魔理沙も意識を取り戻す。

「くそ…紫とバケモン最後の美味しいところだけ全部掻っ攫いやがった…」

「で…この男はちゃんと目覚めるかしら…?」

「やりすぎじゃない？今度こそ死んじやったかもね」
最終話なのだし、縁起でもない事を言う者ではない。

大丈夫。王もレガリアも滅んだが、その宿主にされてしまった霖之助はちゃんと生きている。

その証拠に、霖之助は直ぐに目を覚ました。

「あら、目が覚めたかしら？」

「霊夢…」

「僕は今まで…何をしていたんだ？」

魔理沙の鉄屑から八尺瓊勾玉を見付けてから、一切の記憶が無いんだが…」

「大丈夫よ…」

それに私も久々に刺激が遭って愉しかったわ…」

「そうか…それは何よりだ…」

そう言って霖之助は再び眠気に襲われる。

が、しかし。

ここで終わっては原作の意味がない。

「って、起きなさい森近霖之助…」

「アンタ何いい話オチで締めようと…」「おい」

女の怒りとは何時の時代も恐ろしい。

それが化け物ならば尚更である。

霊夢、魔理沙、紫、咲夜、妖夢、文、アリス、パチュリー、それにいつの間にか復活していた鈴仙と早苗。

彼女らの全身は、もはや怒りに震えていた。

そういった風に、原作通りのギャグオチの流れができかけた所であった。

少女達の背後から、そんな彼女ら全員の怒りをひっくりくるめてもまだ足りない程の怒りと憎悪の籠もった男の低い声がした。

悪い予感しかない。

女達は恐る恐る後ろを振り返る。

そこには、顔面を少し獣化させ恐ろしい顔をしている松葉が居た。

「手前等こそ、何無理矢理原作通りのギャグオチで締めようとしてんだコラ…。」

大体アレだろ…。

この事件の元凶つつたら元はといえば白黒の魔女…手前じゃねえのか？」

そう言われて凍り付く魔理沙。

思えばこの事件は最初から霖之助を演じるレガリアが起こしていたものだ。

レガリアが霖之助に憑く元凶を創ってしまった責任は、自分にも十分有る。

「あと社長…予告も無しに突然家ごとかどう考えても非常識だよな？一介の起業家がやることか？」

次に凍り付いたのは紫。

思えば彼女はアポも無く松葉を幻想郷へ誘い込み、闘争に巻き込み、その上孤立させた。

松葉にとっては迷惑極まりないだろう。

「あと剣士…。手前は何を斬り掛かってんだ？」

俺が人間ならあそこで死んでたぞおい…。

それにお前がさり気なく俺〓敵っていう等式作ってたよな？

他人の話は最後までちゃんと聞くようにって、手前のご両親やお師匠様は教えてくれなかったか？

ついでに侍女、手前も同罪な」

更に妖夢と咲夜も凍り付く。

妖夢は最初に松葉が言っていた事を思い出し、そういえばこいつは自分達の見方だったのだろうと思った。

そしてそんな妖夢に乘せられた咲夜も罪悪感に襲われた。

「あとその金髪と紫色の…手前等群集心理に乘せられて俺に光線放って来てんじゃねえ…」

あとな紫色の、俺はこの姿結構気に行ってたんだよ…毛がない方が何かと便利なことも多いしな…」

アリスとパチュリーも凍り付く。

妖夢と咲夜に乘せられて何となくあの場で松葉を敵認定してしまい、魔理沙の一言が決め手のなってしまった。

松葉の怒りを買っても仕方がない。

「あと黒い翼の嬢ちゃんよ…お前あの時地上に二つ程健康な生き物の気配があつたからまさかとは思うが…復活してたんじゃないか？あの時まで何やってた？」

羽毛の先まで凍り付く文。

文は王の支配から逃れた後、軽傷だったので鈴仙や早苗と違い健康に飛び回ることが出来たし、戦闘にも不足はなかった。

しかしここで彼女は自らの記者としての本能に負け、ずっと自分の新聞に使うための写真を撮っていたのだ。

幾ら記者としての本能だからといって、レガリアと戦っている松葉を放置していたことに変わりはない。

「まあ、何はともあれ罪が無えのは巫女の嬢ちゃんと店主の兄ちゃんに、緑髪ロングの美人さんとブレザーのウサちゃんだけだな…。あとは全員有罪だ…なあ鴉君、九尾の姉さん、あと猫又の嬢ちゃん

よ？」

何処からか飛んできた前鬼・藍・橙に話を振る松葉に対し、それぞれが淡々と答える。

「ええ。そうですね。」

流石に家ごとは無いと思います」

とは前鬼。

「紫様…少しは反省というものをしてください。」

只でさえ昔から二次の方では自重してないんですから…」

とは藍。

「何だかよくわからないけど、みんな悪いと思います」
とは橙。

「で、満場一致な。」

OK。ほんじゃ、反省の時間だ…」

松葉は再び獣化すると、紫を右腕に、魔理沙を左腕に抱え、咲夜を頸に掛け、文を口に銜える。

更に藍はアリスとパチュリーを抱え、橙は妖術で拘束した妖夢を必死に持ち上げて運んでいった。

7人は必死に抵抗するも、松葉の怪力と体力消耗によって思うように動けない魔理沙と紫と咲夜。

文は今すぐにでも松葉に食われそうで怖かったし、残る三人にも強力な拘束系統の妖術が施されていたため藻掻いたところで無駄だった。

その混沌とした光景に、取り残された霊夢、霖之助、早苗、鈴仙はというと、ひたすら何気ない日常会話を繰り返すのみだった。

そして4人は遠くから聞こえてくる7人分の悲鳴を鰥にスルーしつつ、幻想郷で生きる事を許されているという事がどれほど素晴らし

いかを改めて実感したのであった。

6 話「終戦の賛歌」（後書き）

作品のテーマ

『どんな奴だつてヒーローになれる』

『逆境やコンプレックスに負けない心』

『努力している人々への賛美』

番外編「命と自由」(前書き)

無茶苦茶ですがご了承下さい。

番外編「命と自由」

―後日談・幻想郷―

魔理沙はその日、香霖堂のドアの前で、小刻みに震えながら自分に言い聞かせていた。

「アレはレガリアだ、香霖じゃない。アレはレガリアだ、香霖じゃない。」

アレはレガリアだ、香霖じゃない。アレはレガリアだ、香霖じゃない。

アレはレガリアだ、香霖じゃない。アレはレガリアだ、香霖じゃない。

アレはレガリアだ、香霖じゃない。アレはレガリアだ、香霖じゃない。

アレはレガリアだ、香霖じゃない。アレはレガリアだ、香霖じゃない。

アレはレガリアだ、香霖じゃない。アレはレガリアだ、香霖じゃない。

アレはレガリアだ、香霖じゃない。アレはレガリアだ、香霖じゃない。

アレはレガリアだ、香霖じゃない！！断じて違う――っは、私としたことがつい大声を……」

恐怖に震えが止まらないが、仕方ないだろう。

レガリアの脅迫じみた虐待もあるが、それ以上に先日の松葉による拷問の事が大きい。

あれ以来、魔理沙は自分の収集物についてよく考えるようになった。

魔理沙は意を決して、店のドアを開けた。

「お…オッス香霖。」

ミニ八卦炉は直ったか？」

「ああ、待つてたよ魔理沙」

そこにはいつもの霖之助が居た。

「（良かった…いつもの香霖だ…）」

霖之助は魔理沙に八卦炉を差し出す。

「ほら、ちゃんと元通りさ」

「おう、サンキュ」

その時、一瞬魔理沙と霖之助の手が触れた。

思わず後ずさる魔理沙。

「何をしてるんだい…魔理沙…？」

「すまん…思わず…」

「…」
「…」

暫く黙る二人。

「こっ…怖かったんだぞ…？」

「だ…だからあれは僕じゃなくてレガリアで…」

「責任…取って貰うからな？」

魔理沙は震えながら言った。

原作ではラブシーンに見えるこの後日談も、本編がアレではギャグシーンであろう。

「…いや、責任…た…た…」

「とにかく、責任取れよな！」

「いやだから何の責任だよ？」

「責任は責任だ！」

「相変わらずだな……」

―後日談・外界―

近頃、東京で新たなるUMAの目撃情報が相次いでいるという。

その名は、「ジパングデビル」

人型で身長2 m以上、人狼に似るが全身に毛が無く、腕には大きな翼膜があつて空も飛ぶ。

食性や容姿から禿げ狗との関連性を示唆する者もあり、また陸路しか通れない禿げ狗と違いこいつは水上だろうと上空だろうと追つてくるため、悪人達の恐怖はより一層増したのだそうだ。

かの有名なジャージーデビルを元にしたネーミングは、どこかネッシーを元にした日本産水棲UMAの名前の付け方と何処か似ていた。

さて、松葉の壮絶な死闘の夏からはや数ヶ月。

もうすぐ今年も終わりという頃。

松葉は編集部のお忘年会に誘われたが、途中渋滞に巻き込まれ15分ほど会場に送れてしまっていた。

そして会場に急ぐ道中、偶然トイレ帰りの編集長と出会う松葉。

「いやあ、遅れて済みません編集長」

「いやいやいやいや、気にしてないよ？」

何たって手塚君は何時も真面目で僕の要求にも必死で応じてくれるからね。

それよりも手塚君。

ちよつと質問良いかい？」

それまで陽気な顔立ちだった編集長が、突如真剣な眼差しで言った。
「何でしょう、編集長」

「いや何って、判ってる癖に。」

女の子だよ。それも結構な金髪美女。

でも惜しいな。お連れのイケメン眼鏡君が彼氏っぽいからね。

まあ僕にも奥さん居るから無理だけどさ。

二人とも手塚君の知り合いだって言うんで、料金は僕が負担しちゃったから安心してね。

でさ本題。あの二人、誰？」

「…知り合い？金髪美女に眼鏡？」

居たかな。そんな知り合い？」

松葉は正直、思い出せなかった。

「あ、思い出せない？」

まあ良いや。顔見て話せば思い出せると思うよ？」

「そうですね。じゃ、急ぎましようか」

そう言つて松葉と編集長は急いで会場へと向かった。

「あ、編集長！まっちゃーん！

こつちこつちー！早くー！」

同僚の一人がしきりに松葉と編集長を呼んでいる。

「待ってー今行くー。」

ほら、手塚君も急いで急いで。

料理無くなっちゃうよ？」

「そうですね。んじゃ、行きましようか——ア？」

松葉は驚きの余り硬直した。

宴席の中央付近に居たのは、なんと紫と霖之助だったのだ。

松葉は摺り足で急いで偶然空いていた霖之助の隣の席に座ると、霖之助に小声で聞いた。

「よぉ…兄ちゃん…」。

なんでアンタと社長が居るんだよ？」

「久々に遭いたくなっただって…で、霊夢にも魔理沙にも藍にも断られたらしく、挙げ句僕の所に来たってわけさ。」

面倒だから断ろうとしたんだけど、でもやっぱり何て言うかな…外の世界が見られるならこれも良いかなーってさ」

「つか社長冬眠の時期じゃね？」

「その前に食い溜めの時期だったさ」

「熊かあの女…」

「まあまあ落ち着いて。」

僕らも宴会を楽しもうよ」

「そつだな…おう」

松葉は突然立ち上がると、大声で一同の注目を集めるようにして屏風の前に立ち、カラオケセットの準備をるところこう言った。

「はぁーいおk!!!」

そんじゃここで私手塚松葉が一曲歌いたいと思います！」

「イエエエエエエエア!!!!」

会場からは大歓声と拍手喝采の嵐。

「それじゃ皆さん聞いて下さい！」

『プリズム・ザ・ホルモン』で『妖の鎖骨から愛を込めて』!!!」

全力で歌い出す松葉。

場の全員はノリノリである。

そして途中から同僚や編集長も乱入して来たりで、愉快的忘年会は過ぎていった。

帰りの車内で松葉は呟いた。

「自分に命と自由があるってのは、実に最高だな」

番外編「命と自由」(後書き)

・挨拶

と、まあこういうわけで『東方禿狗禄』無事に完結致しました。何だかんだで色々とグダグダなところが多いですね、わかります。それは俺が一番自覚しているつもりです。

しかも主人公がキモイ化け物で殺人鬼、幻想入り、暴力・残酷描写、オリキャラと、人からすれば中二病に見えたりするでしょう。

よって、人によって好き嫌いの激しく分かれる話になってしまったと確信しております。

(折角プロの漫画家に許可頂いたというのになんだこの醜態は…)

・作品の動機や原案について

作品全体の原案は同人誌「幻想郷ノ王」読んだ後に何となく浮かび上がりました。

動機としては、個人的に作中のサービスシーンとオチが若干イマイチだったので、仮にコレを自分風に書いたらどうなるだろうとかという考えでした。

(あの状態で霖之助さん一人に罪が重なるなんて非常識過ぎると思っただですよ…。だってアレの元凶ほぼ魔理沙でしょう…？霖之助さんは自分の意志じゃありませんし、文は復活しても戦闘に荷担してないし…)

禿げ狗のデザインは偶然ネットで見付けた海外製の脱出ゲーム《Arrival In Hell(訳：地獄への到着)》に登場する敵モンスターを参考にしましたが、正直今となっては《NEOLLA》やその続編に登場する敵でも良かった気がします。(その場合通称も変わっていたことでしょう)

・五話から登場した真の黒幕・レガリアについて

レガリアは、後編の中盤辺りで王の人格があまりにも豹変していた事から、これを只単に「神器に操られていた」という真相より「完全に別の意志を持った存在が霖之助を演じていた」という真相にした方がしつくり来る上に面白いのではないか？という考えから生まれたキャラクターです。

彼の性格は凶暴で、残忍で、暴力的で、知的で、しかしどこか色々な物事を楽しんでいるようにも見えます。

このレガリアの性格は、《BLEACH》の更木剣八や《HELLSING》のアレクサンド・アンデルセンのイメージを織り交ぜた上に膨大な「邪悪」を練り込んで作り出されています。更に全体的な印象や戦い方、その絶大な「力」は《SILENT HILL》の三角頭ことレッド・ピラミッド・シングのイメージが強いです。仮にあの時の王の人格に霖之助の自我が混じっていれば、霊夢に刀を突きつけたり、魔理沙の腹を刺したり、紫の脚を撃ち抜いて傷口を踏み付けたり、そこまで酷い真似はまずしないでしょうからね。とはいえ、このレガリアが仮に松葉を倒して幻想郷と外界の支配に成功していたとすれば、二つの世界は一体どうなっていたのでしょうか？

それは作者である俺にも予想が付きません。いや冗談抜きで、本当に思い浮かばないんですって。

・主人公・手塚松葉について

普段は真面目に仕事をこなす超個性派の変人ゲーム誌記者で、連載コーナーも持っている男。

しかしその実態は、夜な夜な出現しては悪人ばかり食い殺す謎のUMA『禿げ狗』であった。

そんな設定の松葉は、顔を隠して暴走族の群れの中へと入って行って歌いながら踊り出すような変な奴です。どう考えても主人公には見えません。

大体変身系の主人公だというのに、変身後の姿が気持ち悪すぎる。

《コスモス荘》のドッコイダーはまだダサイだけで済みますが、コイツに関しては気持ち悪くて怖すぎる。

しかも殺人鬼です。

いくら暴走族やヤクザ等の悪人ばかり狙うからといって、少なくとも今の日本において殺人は立派な犯罪です。

では、何でこんな主人公にしたのか？

理由は簡単です。

普通の主人公では、インパクトが足りない。

これに限ります。

だってねえ。普通の超能力者や達人が現れて、王を倒したところで皆さん、それは典型的というものでしょう？少なくとも俺はそう思っています。

何よりいきなり戦闘に乱入した主人公が、魔理沙一行「正義達と和解し、協力して王を倒すだなんて、あまりにもベタすぎると思います。

しかし最近の色物ライトノベルによく居るような、いつも失敗ばかりの不運で軟弱な少年だとか、スケベでオタクな学生だとか、とても強くて格好良い武術の達人だけど女への免疫が無いとか、そんなんじゃない面白くない！勿論個人的な意味で。

というかそういう主人公が出てくる作品は、もっと色気と笑いが無くては為りません。

作者は技術的な意味や芸風的な意味でエロ書きたくない人間ですし、何より霖之助を豹変させたレガリアという存在を読者様の殺意や嫉妬の対象ではなく、純粋な恐怖の対象として見て欲しいと思っています。

この作品に暴力的な描写が多いのは、こういう理由のためです。まあ奇抜な主人公の方が受けがいいだろうと思ったというのも理由に入りますがね。

大体、不運で軟弱で駄目駄目な主人公が最終的に格好良く成長したり、最初から格好良い主人公が死闘の末に王を倒したりしたら、この作品の『どんな奴でもヒーローになれる』というテーマが意味を成さないと思うのです。

だから俺は、手塚松葉というキャラを作り、彼を主人公にしたのです。

以上で、後書きは終わりです。

最後に、原作である『幻想郷ノ王』五部作を描いて下さり、また執筆許可を下さった友吉先生に、そして何より『東方Project』を世に送り出して下さった偉大なる神主、ZUN様こと太田順也氏に、心の底からお礼を言いたいと思います。

友吉先生、太田様、本当に有り難う御座いました。

これからも、末永く頑張ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7503g/>

東方禿狗禄

2010年12月21日18時44分発行